

# 小学生の部

# 最優秀作

内閣総理大臣賞

栃木県宇都宮市立姿川中央小学校

四年 木戸 瑛梨子

## 初めての班長

「えっ私が班長？ むりだよ。」

お母さんから自分が登校班の班長になったと聞き、私は大きな声でさげんでしまいました。なぜかという、私は一つ上のあきちゃんが班長になると思っていたからです。だけど、一年生が、たく山入ってきたので、今までの班を二つに分けることになり、私がもう一つの班の班長になってしまいました。

毎朝七時十分になると登校班が発します。歩き出すとすぐに丁字路の交差点を横切ります。そこは家に植木があって、右から来る車が見えません。私はいつ

も顔を出して右をかくにんして、ゆっくり歩き出します。よく見る車は、止まってくれますが、時々止まらずに出てくる車があるのでこわいです。安全ミラーがもっと大きいといいなあと思います。坂を下るとまた、丁字路があります。ここはよく見えるので、車が来るのが分かるし、車も横たん歩道の前で止まってくれます。車が止まってくれると私は運転手さんにおじぎをします。そうすると、運転手さんは、にこっとしてくれて、私は朝からうれしい気持ちになります。ふみ切りをこえると、通学路で一番あぶないところになります。そこは道がせまく、カーブになっていて、家も建っているのが見えません。おまけに歩道がありません。私たちと車、自転車、自転車が、ぎりぎりですれちがうところです。雨の日はかさを持つので、かさと車が、ぶつかりそうになります。私は、

「今日は車がこないといいなあ。」

とお願いしながら歩きます。大きな交差点では、車がどんどん曲ってくるし、歩行者の信号は、すぐに赤に変わってしまうので、最後のありさちゃんがわたり終えるために、いつも急ぎ足で歩くようにしています。

学校に着くと、いつもほっとします。

三年生までは、いつも班の後ろの方で歩き、前の人についていけば良かったので、なにも気にしませんでした。しかし、班長になって先頭を歩くようになって、通学路であぶないところが分かったり、車や自転車のこわさを感じたりするようになりました。でも、悪いことだけではありません。車の運転手さんが止まってくれたり、交通指どう員の方々が、いつもやさしく声をかけて下さったりするので、とつてもうれしくなります。これからも、交通安全に気をつけていきたいです。運転手さんや、自転車に乗る人も、交通ルールを守ってくれるとうれしいです。

## 優秀作

内閣府特命担当大臣賞

埼玉県戸田市立戸田第一小学校

一年

池上 いけがみ

旺佑 おうすけ

### こつこつじこにあわないために

ぼくは、おとうさんから、小さい子どもがこつこつじこにあつたことをよくききます。

おとうさんと、ぼくがこつこつじこにあわないようにちゆついでることをはなしあいました。

まず、どうろをわたるときは、おうだんはどうがあるところをわたります。

そして、しんごうをまもつて、どうろをわたるときは、かならず右左右をみて、くるまがこないかみます。

おとうさんから、ぼくみたいにせが小さい子どもは、くるまやじてんしゃのつんでんしゅさんからみえない

ときがあるとおしえてもらいました。

おとうさんが、ぼくとおなじせのダンボールをつくってくるまのまえにおきました。

そして、うんでんせきにのせてもらって、まえをみたら、ぼくとおなじせのダンボールがみえませんでした。

うんでんしゅは、ぼくみたいな小さい子どもがみえないときもあることがわかってこわいとおもいました。

とくに、トラックとせがたかいくるまにきをつけようとおもいました。

だから、どうろをわたるときは、手を上げて、じぶんのことを大きくみせることがだいじだとわかりました。

くるまがいっぱいとまっているちゅうしゅじょうでも、ぼくみたいな小さい子どもは、うんでんしゅさんからみえないので、ふざけてはいけないとわかりました。

そして、がっこうからかえってくるときは、くるまがきゅうにでてくるときがあるので、はしってかえる

ことは、あぶないとわかりました。

む中になつてしゅべつたり、ふざけながらかえってくるまやじてんしゅがくるのがみえなくなるから、きをつけることがだいじだとわかりました。

おとうさんとおかあさんからもらった、だいじなからだを、こうつうじこでなくさないようにきをつけます。

埼玉県加須市立北川辺西小学校

二年

岡田 おかだ

花奈 はるな

## わが家のこうつうあんぜん

わたしの家では、「さいかくにん、これがみんなのあいことは」です。車がたくさんとおるどうろに家があるので、学校へいくときなど、どうろをわたらないといけません。だから、わたしの家では、何かいも右や左を見てわたるきまりになっています。

わたしのパパは、家でじどう車をなおすしごとをしています。こしょうした車だけでなく、じこにあいつぶれた車、やけている車など、さまざまな車がはこばれてきます。車と車のじこだけでなく、人と車、じてん車と車でぶつかったときもへこんだりするのです。わたしは、そんな車を目にする、ぞっとしてふくざつなきもちになります。もし、この車とぶつかったのが、わたしだったら、「こんなにへこんでいるのだから、ものすごくいたいのだろうなあ」とかあたまの中でかえただけでも、とてもこわくなります。だからこそ、わたしもまい日きをつけなければいけないと思います。そんな車をまい日のようになおしているパパだからこそ、「ちゃんと見てわたれ」とおなじことをなれども言ってくれるのだと思います。ときどき、「うるさい」とか「もう、わかってる」と思うときがありますが、こうならないようにとおしえてくれているのだと思います。

わたしは、いもつとが一人います。まだ、よくかくにんするいみが、わかっていませんが、わかるまで、パパのようにおしえていきたいと思います。

あるとき、やっていねばとこつかいするのではなく、自分でできることをきちんとやってこつつじこにあわないようにちゆういしていききたいと思います。

岡山県倉敷市立中洲小学校

三年

山本 やまもと

夢達 ゆめあ

## おじいちゃんのカーブミラー

私は、毎朝お母さんと一しよに七時三十分に出ます。かいらん板がきているときは、かいらん板を持ってとなりの家に行つてから、登校はんの集合場所に行きます。

この前、かいらん板をとりの家にとどけて、集合場所に行こうとしたら、お母さんの車が道路から出てきて、ひかれそうになりました。私は、カーブミラーを見ていませんでした。私は、「キヤー。」

と、ひめいをあげそうになりました。お母さんもすぐ気がついて、いそいで車をとめました。お母さんもびびくりしていました。そして、お母さんが車のまどを開けて、

「さっきのあぶなかつたね。気をつけて、学校に行つてね。」

「うん、わかった。気をつけて、学校に行くよ。お母さんも、気をつけて仕事に行つてね。」

と私は言つて、みんながまつている集合場所に行つて、お母さんは仕事に行きました。

学校から帰つてから、朝のことを話し合いました。私もお母さんもいそいでいたのだと思いました。いままでは、あのミラーを気にしていなかつたけど、これからは、きちんと見ようと思いました。すると、お母さんが、

「あのミラーを作つたのだれだと思う。」

と言つたので、私は考えました。それでもわからなかつたので、お母さんに聞きました。そしたらお母さんが、「あのミラーは、おじいちゃんがつくつたんだよ。」と言つてくれました。そこでおじいちゃんに、どうし

てミラーを作つたか聞いてみました。

「大きな道路の左右からくる自どう車や自てん車や人とぶつかつて大じこにならないように、見やすい所にミラーをとりつけたんだよ。」

とおじいちゃんが、教えてくれました。つぎに、おとなりの人に、

「あのカーブミラーは、やくにたつていて、見やすいですか。」

と、たずねました。そしたら、おとなりの人が、

「やくにたつていて、高さちがいで二つあるのでよく見えているよ。」

と、言つてくれて、とてもうれしかつたです。

おじいちゃんは、自分の家のことだけではなく、きんじよの人のことも考えていて、すごいと思いました。おじいちゃんとお母さんの車は、せが高いけど、となりの車はせがひくいから、カーブミラーを二つつけたのだと思いました。歩く人も、せの高さがちがつても、見やすいと思いました。このカーブミラーのおかげで、三十年間じこがなかつたと聞きました。おじいちゃんが作つたカーブミラーは、私の自まんのカーブミラー

です。私はこれからこのカーブミラーを大切にしたいです。

香川県高松市立牟礼小学校

四年

久部 ひさへ

桃子 ももこ

## ヘルメットをかぶって安全運転

「図書館行こうか。」

「うん、自転車で行きたい！」

わたしの家の近くには図書館があつて、よくお母さんと妹と図書館に行きます。その時はいつも、自転車で行きたいとお母さんにおねがいします。わたしは、自転車に乗ることはあまりなくて、車が多く走る大きな道では自転車に乗ったことがあります。でも図書館までは家からも近いし、いつも自転車で行きます。自転車に乗ると速いし、気持ち良くて大すきです。

いつものように三人で図書館に行こうとした時、わ

たしは図書カードをわすれて、部屋に取りにもどりました。お母さんと妹は自転車に乗って待っていてくれました。

「早く行こうよ。」

と、妹がもう家のまわりをぐるぐる自転車走っていきます。わたしも急いで自転車に乗って出発しようと思いました。お母さんが、

「ヘルメットちゃんと着けなさい。」

「だって……」

わたしは、早く行きたいし近いし、ちょっとくらいいいかなと思つて、行こうとすると、お母さんに注意されました。

「自転車を運転するのはももちゃんだよ。自分で守らなきゃ。」

と言われました。

運転という言葉聞いて、わたしは、「自転車は車のなかまでです。」という言葉思い出しました。四年生になって、学校で自転車教室がありました。その時交通指どう員の方から、自転車は車のなかまなので左側通行、一時的に止や左右かくにんのルールを守る、

子どもはヘルメットをかぶって安全に運転しなければならぬと教わりました。

お父さんやお母さんは車を運転する時、必ずシートベルトをしています。シートベルトは事故にあった時、命を守ってくれます。ヘルメットも転んだ時や事故にあった時、頭の大きなけがから守ってくれます。わたしは、ヘルメットはシートベルトの様なものだなと思いました。自転車に乗る時は、必ずヘルメットをかぶってから出発しようと思いました。

自転車教室では、最後に自転車運転めんきょしようももらいました。自動車のめんきょしようでは、事故もなくルールを守る運転者には、ゴールドめんきょしようがもらえるそうです。わたしも、自転車のゴールドめんきょしようを目指して、これからもヘルメットをかぶって安全運転をします。

香川県丸亀市立城東小学校

五年

小西 こにし

健太郎 けんたろう

## ぼくが気をつけていること

ぼくは五年生になつて友達の家遊びに行ったり外で遊ぶことが多くなりました。四年生までは全然一人で自転車に乗ってでかけることがなかったのでお父さんとお母さんはぼくが一人で自転車で出かけるのが心配みたいです。

ぼくが出かけるといつたらお母さんはこれでもかといくら注意してきます。

「車に気をつけなよ。信号が変わりそうになったら次の青まで待たないかんぞ。友達がなんぼはよいつても競争ちゃうけんな、いそがんでええで、ゆっくりこぎや、上り坂は無理せんとおしや、ふらつとなつて車が通んじよるほうにたおれてしもたらいかんけんな。いつも通んじよる道でも何ががあるかからんけん気をつけなよ……」



ぼくが自転車に乗ってはしりだしてもまだまだ大きな声で聞こえてきます。

いつもお母さんはうるさいな、分かつとるわ、と思いつながら出かけていました。でもこの間自転車をこいでいる時、右足がペダルからすべってからふらつとしてころびそうになりました。車が通るほうにたおれないようにギユッとブレーキをかけて地面に足をつけてふんばりました。

「うわ、やばかった。」

心ぞうがドキドキしました。

「いつも通んじよる道でも何があるか分からんけん気をつけなよ。」

いつもぼくが出かける時にお母さんが言っている言葉が思いつかびました。

お母さんが運転する車で出かける時にぼくに教えてくださいなよ。

「自転車に乗るほうにしたら大じょう夫やと思つていふことでも車側にしたらあぶないなあと思つていふことある。車側が大じょう夫だと思つても自転車からしたらあぶないと思つていふことがある。」

お母さんは自転車と車と両方乗るようになって初めて両方の気持ちがあつたわ。」

ぼくはまだ車を運転することはできませんがみんながみんなおたがいに相手のことをおもつて道路を通れば事故もなく安全でいられるのだなあと思ひました。

ぼくは今、友達と遊ぶのが楽しくて楽しくてたまりません。遊びに行く時は必ず自転車に乗ります。

「信号が青でもかくにんしてわたる。曲がりかどでは車がきていなか止まる。ゆつくりこく。無茶な運転はしない。」自分が今気をつけなければならぬなあと思つていふことも思ひながら、自転車に乗ろうと思ひます。

## 心のゆとりで減らせる危険

「おくれてもいいから、ほんとに気を付けてじゅくまで行つてね。」

ある日の夕方、お母さんはそう言つて、私を見送つてくれた。

「は〜い。わかりましたあ。」

塾までは、自転車を一こげば七分で着ける。ちよつと準備や宿題の仕上げに時間がかかつてしまったけれど、やっぱり遅れたくはないし、今日もダッシュで行こう。そう思つて家を出た。

一つ目の曲がり角を曲がってこいでいると、小さい子供たちが道路でサッカーをしていた。ボールが飛んで来そうだったけれど、サーツと横を通つた。二つ目の曲がり角を曲がると、お年寄りが夕方の散歩でゆっくりと歩いていて、気を付けて、横をそつと通つた。

そして三つ目の曲がり角を曲がって、少し広い道路に出た。向こうからたくさん自転車が走つて来た。子供を後ろに乗せた買い物帰りの主婦の人、会社へ戻るところのようなサラリーマン、私と同じように塾に向かつている男の子。みんな顔が真剣でスピードを出していてゆずる気配もない。私も同じだ。

危ない！ 私の自転車が、塾に向かう男の子とすれちがう時、もう少しで接触しそうになった。ひやつとした。

次に横断歩道のある通りに出た。夕方なので車通りがとても多い。右左を見て慎重に渡る。ここからは民家が立ち並び、人も車も少ない道なので、少しスピードを出して走つた。

総合病院前の大きな交差点まで来た。塾まであと少し。青信号に変わり、さつと交差点を渡り、お母さんの言葉を思い出したが、またスピードを上げて、歩行者の人に注意しながら走つて行つた。

もう少しだががんばろう！と思つて自転車をこいでいた。すると、向こうからスマートフォンでメールをしながら自転車に乗つて来る大学生のお兄さんが私の方

へ寄つて来た。全く前を見ず、メールに夢中だ。

ぶつかつてしまつ！そう思つて私はあわてて「危ないです！」と叫んだ。お兄さんは我に返り、ぎりぎりのところでハンドルを切つて止まつた。

「ごめんね。」そう言つてお兄さんは走り去り、私も塾へ急ぎ何とが間に合つた。

その日は塾に行くまで危険がいつぱいだった。自転車のお兄さんとはぶつかりそうになつてほんとにこわかつた。相手側の不注意でさけられない事故もある。でも、私ももう少しだけ早く家を出て、心にゆとりを持つていれば、今日こわいと思つたことももつと減らせるのではないかなあと思つた。

次の日、少し早めに家を出て塾に向かつた。また道路で遊ぶ小さな子供たち、散歩を楽しむお年寄り、向こうから急いで走つて来るいろいろな自転車…まわりの様子は昨日とあまり変わらなかつたけれど、時間に余裕があつたので、危ないと思つた時は、先に止まつてゆづつたりできた。すると笑顔で人とすれちがうこともできた。塾にも早めに着けたし、「こわい！」「危ない！」と思つことがとても少なかつた。

相手にゆづれる、待つことのできる心のゆとりをお互いに持つことで、みんなが笑顔で安全に過ごせるのではないかな、と思つた。

## 佳作

内閣府政策統括官賞

福島県須賀川市立第一小学校

一年 伊藤 健太  
いと う けん た

### 一ねんせいになつて

ぼくは、四がつから、一ねんせいになりました。いままでは、まいにち、おとうさんか、おかあさんのくるまにのつて、ようちえんにいっていました。でも、一ねんせいには、みんなであるいてがつっこうにいきます。ぼくのとうごうはんは、じゅういちにんです。ぼくのおねえちゃんがおねえちゃんです。そして、おねえちゃんのおしるしがぼくです。おにいちゃんは、まえからななばんです。

おねえちゃんは、いつも、「けんた、ちよろちよろしないで、ちゃんとならんで。」

といいます。ぼくは、いつものおねえちゃんとちがうので、へんなかんじがします。かおも、こえも、すこしこわいからです。

みんながあつまるとしゅっぱつです。ぼくは、おねえちゃんのらんどせるをみながら、あるきます。おねえちゃんは、なんにも、はなさないであります。だから、ぼくも、なんにもしゃべらないであります。ときどき、ぼくのとたりをくるまがとおります。すこいおとがします。のつているときはしなないけど、あるいているときは、すぐきこえます。すこしこわいおとのときもあります。ぼくのおにいちゃんは、ときどき、おにいちゃんのとちとあしやべりしながらあるいています。おなじとうごうはんのとちとあしのおかあさんに、ちゅういされます。ぼくは、うしろにならんでいるおにいちゃんのことやしんばいです。くるまにぶつからないように、いちれつになつてあるいてほしいです。

がつっこうのまえには、おうだんほごうがあります。まいにち、きいろいはたをもつたおじさんがいます。ぼくたちがくるまにぶつからないようにみてくれま

す。あめのひも、おじさんはいます。そして、きいろいはたをくるまのほうにあげて、ぼくたちのことをわたらせてくれます。まいにち、やすまないで、いってくれるので、えらいなとおもいます。おねえちゃんは、「おはようございます。」

と、おおきなこえであいさつをしています。でも、ぼくは、あいさつをわすれてしまふときがあります。ここからは、あいさつをがんばりたいです。

がっこうのかえりは、じどうかんにいきます。はじめのころは、せんせいもいっしょにあるいてくれたけど、いまは、ぼくたちだけです。せんせいは、「ひとのいえにいったり、とちゅうでみみずをとったりしないですね。」

といます。ぼくは、やくそくをまもって、きまつたみちがあるいてかえります。

くるまにぶつかるといけないし、ちもでるし、おねえちゃんも、おにいちゃんも、おとうさんも、おかあさんも、おじいちゃんも、おばあちゃんもなみだがであるので、きをつけてあるきたいです。

## きいろいはたはともだち

わたしが、がっこうへいくしんごうのところには、おうだんほどがあります。そこには、きいろいはたがあります。さいしょは、三かくのかたちをしているとおもったのですが、もってみたら四かくのかたちをしています。このはたをもっておうだんほどどうをわたります。わたったらしんごうのしたにしまいます。そうすればがっこうからかえるときに、またはたをつかうことができます。とてもべんりだなとおもいます。どうしてこのはたをもつてわたるのか、しんごうのところになつているおばあちゃんにきいてみました。「どうしてここにはたがあるんですか。」

「このはたは小さいこをまもるはただよ。小さいこは、くるまをうんでんする人からみえないことがあるけど、このはたがあればうんでんする人はいつでもくる

まをとめることができるんだよ。」

わたしもはたをもつておうだんほどうをわたつてみました。くるまはきませんでした。でもこのはたをもつていれば、いつでもうんでんしゅさんはわたしにきがついてくれるとおもつと、とてもうれしかったです。そしてきいろはとおくからでもめだついろで、わたしたちのぼうしやランドセルのカバーもおなじいろになつていることもわかりました。小さいこは、みんなこのきいろのはたをつかつたぼうがいろいろとおもいます。こんどはともだちにもいつて、みんなでつかううにしたいとおもいます。

おばあちゃんは、またいいました。

「でもね、はたをもつているだけであんしんしてはいけないよ。おうだんほどうをわたる人みんなが、さゆうをよくみてわたるようにしてね。一人一人がきをつけることがたいせつなんだよ。」

「はい。」

わたしはへんじをしました。

これからは、はたをもつけど、どつろをわたるときはみぎとひだりをよくみて、くるまがこないのをかく

にんしてからわたるようにきをつけたいとおもいます。

そしてずつときいろいはたとともだちでいたいです。

東京都多摩市立連光寺小学校

一年

福井

凜太郎

## いのちはたからも

「みぎ、ひだり、みぎ。よし、こない。」

ぼくは、てをしつかりあげておうだんほどうをわたる。ぼくのすんでいるちいきは、いちねんせいはい、こどもだけでじてんしゃにのつてはいけないきまりがあるから、まずくるまやじてんしゃにきをつけてあるくことをがんばっている。みちのまんなかをあるいたり、とおりにきゅうにとびだしたりしないようにしている。

ぼくのパパとママは、こうつうじこにあったことがあつて、まえにそのはなしをきいてから、ぼくはとくにくるまにきをつけるようになった。

ぼくが1さいのころ、おじいちゃんおばあちゃんにぼくをあずけて、パパとママはくるままでかいものに入ったそうだ。いえをでてすぐのT<sup>テ</sup>じろになつていゝところで、しんごうむしをしたくるまがパパのくるまにつつこんできて、くるまはくるくるまわつてとまり、ぶつかつたところはくちゃくちゃになつたときいて、ぼくはとてもびっくりした。くるまはいしやになつたけどパパもママもおおきなけにはならなくて、ほんとうによかつたとおもつた。もし、そのときのじこでパパとママがしんでしまつていたら、ぼくはひとりぼっちになつていたかもしれないとおもうと、とてもかなしくなつた。

それに、じこにあつたとき、ママのおなかにはぼくのいもうとがいたそうだ。ものすごいしょげきでママはおなかがいたくなつたけど、びょういんでみてもらつたらなんともなく、そのあとぶじにいもうとがうまれてきてくれたそうだ。いつもいっしょにあそん

でいるいもうとが、もしいなくなつたらなんてかんがえられない。ぼくはパパもママもいもうともだいすきだから、みんながいきていてくれてほんとうによかつた。

くるまはべんりなものだけけど、かんたんにひとのいのちをうばつてしまつこともある。でも、いのちはひとつしかないし、どこにもかわりはうつていない。だからぼくも、パパとママからもらつたいのちを、これからもずっとたいせつにしていきたいとおもう。それから、おおきくなつて、くるまをうんでんするようになったら、ひとのいのちをうばわないようにきをつけたいとおもつた。

さいきん、おうだんほどうをわたるとき、いもうとはぼくのまねをする。

「みぎ、ひだり、みぎ。よし、こない。」  
「いって、てをぴんとあげている。」

ぼくもいもうとも、こうつうじこにあわないうつに、おおきくなるまでしっかりてをあげてがんばるぞ。

## みえないてをつないで

「あしたから、ひとりでいくんだよ。」

おかあさんがにゅうがくしきのかえりみちにいまました。ようちえんのときは、どこにいくときもおかあさんといっしょでした。いつもおかあさんとてをつないでいました。ひとりでだいじょうぶかな。いっしょにきてくれないかな。がっこうがたのしみでわくわくしたけれど、ひとりで行くのはすこしこわくてどきどきしました。がっこうのよういできているかしんばいで、なんどもランドセルをみました。

あさ、

「いつてきます。」

と、げんかんをでると、

「いつてらっしゃい。」

と、いいながら、おかあさんがいっしょにそとにでて

くれました。なんどもふりかえっておかあさんにてをふりました。

まつすぐいくとさかのしたにでます。もういちどふりかえって、おかあさんにてをふりました。かどをまがると、おかあさんは、もうみえません。やっぱりいえにかえろうかな、とおもいました。でもそこには、みまもりのおとうさんやおかあさんがいます。

「おはようございます。」  
と、あいさつをします。

さかのしたは、いろんながくねんのおともだちがとおるので、いっしょにがっこうにむかいます。

つぎのかどにはおみせがあつて、おみせのおねえさんがみまもりをしてくれます。おおきなこえであいさつをします。

ガードレールのあるほどつをあるいていきます。とちゅうのゆうびんきょくやガソリンスタンドにくるまがはいるときはとまってまちます。ガソリンスタンドのおじさんが、

「はい、おまたせ。」

と、いつてとおしてくれます。



がっこうのまえには、おうだんほどうがあります。そこには、はたをもっているひとがいて、いっしょにわたってください。

がっこうにつくと、いり口でけいびいんの人と、先生たちがあいさつをしてくれます。わたしもげんきよくあいさつをします。

「ひとりでがっこうにいくんだよ。」  
と、いわれてどきどきしたけれど、いつもいろいろなひとがみまもってくれて、わたしはひとりではありません。みえないてをだれかをつないでいるみたいです。おともだちがみんなけをししたりじこにあったりしないであんぜんにがっこうにいけるのは、たくさんのみえないてがごうごうじこにあわないようにまもってくれるからです。わたしもごうごうルールをまもって、あんぜんなごうごうにしたいです。

## まっくろごげばんのおとうさん

わたしのおとうさんは、ゆうびんはいたつのしごとをしています。なつはまっくろごげばんになりなす。おしょうがつは、ねんがじょうをまっているひとがたたくさんいるので、ずつとじごとです。

そんなおとうさんが、ごうごうじこにいました。みんなかえってこなくて、しごとがおそくなるからいなんだよといわれて、ひいおじいちゃんといっしょにいてまっています。ひいおじいちゃんは、にこにこしていても、なにかいつもとちがっていて、わらってくれているも、なっているみたいにみえました。

おかあさんがびょういんからでんわをもらったとき

は、

「はやくきてください。」

とだけいわれたそうです。からだがずつとごうごうになく

なるかもしれないし、しごとができなくなるかもわからないし、びょういんまでがとつてもとおかつたとあとではなしてくれました。わたしともうとは、3日あとにはじめてびょういんにいきました。おとうさんは、あたまでもあしもほうたいでぐるぐるまきで、てのほねも、こしのほねもおれていました。おとうさんは、にっこりしていたみたいだけど、ちがうひとみたくて。いもうとといっしょに、おかあさんのてをぎゅうつとつよくもつていないと、なみだがたくさんでてしまいそうになりました。

おとうさんがこないたいことになったし、おかあさんはかえってこないし、たくさんさみしいきもちになったので、あいてのひとがだいきらいでした。あいてのひとがいなかったら、いつもみたいに、いえにかえて、おとうさんとあそんでもらって、いっしょにねられるのとおもいました。

でも、あいてのひとが、びょういんにきたとき、ないていました。

「ごめんなさい、すいません。」  
とばかりいつていて、かわいそうになりました。あい

てのひとわたしとおんなじさみしいきもちとか、どうしようというきもちがたくさんもっているんだとおもいました。おかあさんが、こうつうじこは、みんなおこしたくしておすのではないから、おとうさんがたいへんなのはよくわかるけど、じぶんがけをしたよりも、もつとあいてのひとはころがいたいんだよといったことがやつとわかりました。

こうつうじこは、みんなのころがたくさんないてしまいます。こうつうじこはおこしてはいけないことだとよくわかりました。ぜつたいにわすれないでおこうとおもいました。

いまは、おとうさんは、まっくらこげばんです。しごとのひとたちにたくさんたくさんたすけてもらって、ゆうびんはいたつで、おきやくさんをえがおにしています。ちょっとだけてのゆびがへんなかたになつてしまつたけど、わたしは、いまのまっくらこげばんのおとうさんがだいすきです。

## ぼくとヘルメット

学校のこうつうあんぜん教しつで、自てん車にのる時は、ヘルメットをかぶることを教わりました。ヘルメットは、ころんだり、じこにあった時、あたまをまもってくれる大切なものだとしりました。

今までは、ヘルメットをかぶらないで、家のまわりをはしっていました。

その日、学校からかえると、お母さんが、「自てん車にのつてあそんだら。」

と言ったので、ぼくは、

「ヘルメットをかぶらないと、自てん車にのつたらだめなんだよ。」

とこうつうあんぜん教しつで聞いたことを話しました。

お母さんは、

「お兄ちゃんのヘルメットはかったけど、しゅう太のはかつてなかったね。」

と言ったので、ぼくは、なんだかなくなりました。

お兄ちゃんは、中学生になったので、白いヘルメットをかぶっています。ぼくは、いいなと思いました。

「今ど、休みの時にかいに行こう。」

と、お母さんが言ってくれました。

それまでは、ヘルメットがないので、自てん車にのるのをがまんしました。

夏休みになったので、今日、ヘルメットをかいに行きました。

ぼくは、青と水色のヘルメットをかってもらってうれしかったです。

家にかえつてから、お母さんに、ヘルメットのせつ明書を読んでもらいました。そして、お母さんが、あごひもをぼくに合わせてくれました。

今日は、雨で天気が変わるので、自てん車にのれません。あした、晴れたら自てん車にのりたいです。

じこにあわないうちに気をつけて、こうつうルールをまもりたいと思います。

埼玉県さいたま市立美園小学校

二年

はせがわ  
長谷川

りよっせい  
亮成

## 青は止まれ

ぼくは、一年生の時、交通じこにあいました。

かぞくで、出かけている時、ぼくはいそいでいたの  
で、一目さんでしんごうをわたろうとしました。ぼく  
は、「青だ。いそいでわたろう。」と思って、左右を見  
ないではまりました。その時、車がすこいはやさでつっ  
こんできました。そしてぼくが、その車にひかれてし  
まいました。目の前がしゅんくらくらくなって、「しん  
だ。」と思いました。

ぼくが車道にたおれていたので大人の人が歩道のよ  
こにいどうしてくれました。いもうとが、びっくりし  
て大なきしました。おかあさんは、とても心ばいして  
いるようなかおをしていました。ぼくは、こしと、ひ  
ざと、足の小ゆびがズキズキといたみました。その後  
きゆうきゆう車やパトカーがきました。それを見てぼ

くは、「ああ、やつちやったな。」と、思いました。びよ  
ういんでレントゲンをとりましたが、いじょうなして  
した。

いえにかえってきて、おかあさんが、言いました。  
「おかあさん、何でも何どもちゅういしたよね。でも  
いつも同じことをくりかえすからこのままじゃ、いつ  
かりようせいと一生会えなくなる日がくる。だから、  
これからは、本当に気をつけてね。」

おかあさんは、とてもしんけんなおでした。  
けいさつしよの人にも、一年生の時のたんにんの先  
生にも、いろいろなことを言われました。ぼくは、先  
生の話聞いていて、「何てことをしてしまっただ。  
二どとこんなけいけんは、したくない。」と思いました。  
二年生の交通安全教室では、赤は止まれ、黄色は止  
まれ、青は止まれ、とならいました。青は止まれば、  
青でも一ど止まり、左右を見るといいみです。

今でも、左右を見ないでとび出してしまうことがあ  
ります。でも自分で「左右を見るんだ。」と言い聞か  
せています。そしてこれからは、ぜったいに交通じこ  
にあわなないようにしたいです。

## じてん車の交通あんぜん

なつ休みにはいつてすぐわたしは、家ぞくと交通あんぜんについて話をしました。なぜかというとしてん車にのれるようになったからです。

いつもは、家のまわりの車が通らないあんぜんなところのついでいます。でも、ときどき、道ろでのじてん車ののりかたのルールをおぼえるために、お母さんがすぐ近くについて道ろでのるれんしゅうをしていきます。

じてん車にのる時のやくそくは、よそ見をしないで前をむく。二人のりをしない。車や歩いている人、わたしいがいのじてん車にのっている人に気をつける。歩く人は右がわ、車やじてん車は左がわを通るなどがあります。

少し前のこと、道ろでじてん車にのっていた時、わ

たしは、お母さんからおこられてしまいました。わたしが、後ろからくるまがきていないかをかくにんせず道ろをわたってしまったからです。歩いている時は左右を見てからわたりますが、じてん車は後ろをふりかえって見なければいけません。じてん車にのりながら後ろを見ると、ふらふらしてしまいます。だから、じてん車にのっている時に道ろをわたる時は、かならず一ど止まってから車がきていないかかくにんしてわたることをやくそくしました。

もしもあの時

「車がきていたらじこにあつていたかもしれぬ。」とお母さんと話して、わたしは、こわくなりました。車が通っていなくて本とうによかったです。

のつてたのしいじてん車も、やくそくをまもらなければ大けがをしてしまうかもしれぬ。もしも、ころんでしまった時のために、ヘルメットをかぶって、ルールをよくまもり、たのしくじてん車にのることができるようにしたいと思います。

## ぼくのおまじない

「右、左、右、パツ。手を上げてわたりましょう。」

これは、ぼくがおうだん歩どうをわたるときに、かならず言っている言ばです。右を見て左を見て、もう一回右を見て、パツと手を上げます。そして、しんこうが青でもすぐにわたらないで、車がこないかよくたしかめてからわたります。

これは、ぼくがようちえんにかよっているときに、やまびこクラブのおかあさんたちにならった言ばです。

やまびこクラブのおかあさんたちは、おうだん歩どうのわたりかたや、しんこうの見かた、雨の日や雪の日の歩きかたなど、ぼくたちがこう通じこにあわないうように、いろんなことを教えてくれました。

ぼくのおかあさんもやまびこクラブでした。大人の

人はおうだん歩どうをわたるときに、あまり手を上げないけれど、どうして子どもは上げるのか聞いてみました。そうしたら、ぼくたちが手を上げてわたるのは、ちゃんとりゆうがありました。それは体の小さいぼくたちが、

「おうだん歩どうをわたつてますよ。車をうんでんしているみなさん、止まっていて下さいね。」とお知らせするためでした。

ぼくはようちえんをそつえんしてからも、ずっとこの言ばを言いつづけています。ぼくのおねえちゃんも同じようちえんだつたので、いつしよにでかけたときには二人で言っています。じつは、この言ばはうたになっと思っています。だからずっとおぼえていられるのかなあと思います。

ぼくは今までに、車にひかれそうになつたことや、ヒヤリとしたことは一どもありません。きつとこの言ばにまもられているからだと思います。

この言ばはぼくがこう通じこにあわないうためのおまじないです。これからもゆだんしないで、おうだん歩どうをわたるときには言いたいと思います。

## ぼくがかんがえたこうつつあんぜん

「ブーン、ブーン。」

ここは、ぼくのつう学ろです。その中でも一ばん気をつけなさいといけない、カーブになっている車のたぐさんとおる大きな道ろです。

ぼくは、バスつう学をしています。家からバスまで十分はかかります。バスでいまでの道を、一年生の時から一人であるいています。でも、お母さんは、子どもが一人であるくのがあぶないからといって、小さい妹と弟をつれてバスでいまでいっしょに行つてくれています。お母さんのおなかの中には赤ちゃんもいて、とても大へんだと思います。

この道は、つうぎん時かんでもあるので、車がたぐさんとおると、車もぼくに気づくのがおそいせいか、なかなかとまってくれません。そのおつだんほどうに

は、はたもないのでいつもわたる時にふあんでした。でも、ある時に、ぼうしをはたみたいにしたら、すぐに車がとまってくれました。そして、わたったあとぼうしをぬいだまま車にむかっておじぎをしました。したら、あいてもおじぎをしてくれました。じ分であんぜんにわたることができて、うれしかったです。なぜそういうわたり方をはじめたかという、ぼうしの黄色が、はたのようにめだつかなと思つたからです。さいごに、ぼくは、はたやしんこうのないおうだんほどうでも、じぶんのいのちをまもるためにみんなにためしてほしいなと思いました。

## ぼくの友だち

ぼくは、自転車にのるのが大好きです。自転車はぼくの大好きな所に、いつも連れてつてくれます。それは、ぼくのおばあちゃん家、友だちの家、公園などぼくが行きたい所に連れてつてくれるからです。

自転車にのるのは、とっても楽しくて気持ちが良いです。天気の良い日は、もう最高です。青い空やいろんな建物の中をスイスイとい動ができるので、体にかんじる風がとっても気持ちが良いからです。風は、ぼくにいろんなことを教えてくれます。春はタンポポやつくし、さくらなど、たくさんのお花がさき、あたたかい風をかんじることができます。夏は、セミなどの虫の声やヒマワリのお花、公園には、カブトムシなども見つけることができます。秋は、たくさんのお木から葉っぱが落ちて、山や木などの紅葉がはじまり、冬のじゅん

びがはじまります。冬は息が白くなり、風がとってもつめたいですが手ぶくろやマフラーをしながら自転車にのります。自転車にのると、一年中を通して、その時の季節の風やにおいを感じることができます。

大好きな自転車にのるのには大切なルールがあります。それは、必ず、自転車にのる時には大切な頭を守るためにヘルメットをかぶること。自転車にのる前には、自転車の点検をすることです。自転車にのって転ばないようにタイヤの空気がちゃんと入っているか？ ぼくの足が自転車にのった時に、りょう足がちゃんと地面についているか？ きけんを周りの人に分かってもらえるようにベルがちゃんと「チリンチリン」って鳴るのか？ ブレーキはだいじょうぶ？

と、自転車にのるまでにはたくさんのお点検をしなければなりません。でも、大切な命を自分で守らなければならぬし、夕方などのうす暗い時に、ぼくが自転車にのっていることを周りの歩いている人や車にのっている人に知らせなければいけないからです。自転車は、思いっきり力を入れてこぐとすごいスピードがでます。本当にスパーカーのようにはいかないけど、



かなりのスピードがでてしまうので、歩いている人や車にぶつからないように、ぼくは自転車の安全運転に気をつけています。どこにでも、大好きな場所に連れていってくれる自転車はぼくの大切な宝物でもあり、大切な友だちです。

これからも、大切な自転車といっしょに、交通ルールを守って、事こやケガなどがないようにちゅういしていきたいと思います。

神奈川県 私立精華小学校

三年

岡田 おかた

空夏 くうが

## 歩くイルミネーション

ぼくは夕方をすぎると、歩くイルミネーションになります。

それは、黄色のTシャツに、ぼうしと、くつと、カバンにはんしゃざいをつけているからです。

真冬で、真つくらになつたから、とお母さんが習字教室までむかえに来てくれた日のことです。毎日いっしょにいるのに、お母さんはぼくに気づかず、通りすぎてしまったのです。ぼくはあわてて、

「お母さん！」

とよびとめました。お母さんは、

「ビックリした。くらやみに同化してて、分からなかった。ごめんね。」

と言いました。たしかに、ぼくの服そうは、すみでよごれてもいいように上下まっ黒、くつははい色のスニーカー、習字カバンはこん色で、夜のけ色とアスファルトにとけこんでいました。

家に帰って、お父さんとお母さんとぼくで話し合いました。

歩いていても目立たないということは、車のうんてん手さんから見るとぼくは、もつと目立たず、分かりにくいのではないか。ということは、いつじこにあつてもおかしくないじゃないか、と三人の顔はだんだんと青ざめていきました。

そこで、どうすれば、みぜんにじこをふせぐことが

できるのか相だんしました。まず、今度から、帰りがくらくなる時は、車のうんてん手さんから分かりやすい色の服を着ることにきめました。そして、光があたると夜でもキラキラと光るはんしゃざいのついたキーホルダーをカバンやカギにつけることにしました。

お父さんが

「車のうんてん手さんも、歩行者も交通ルールを守るのはとうぜんだね。でも、さらに“うんてん手さんから見えやすい歩行者になる”っていう、やさしい心づかいができるようになると交通マナーの上級者だね。」と言いました。

それからのぼくは、歩くイルミネーションです。はじめは少しはずかしかったけれど、もうお母さんに気づかれない事もあります。交通マナーの上級者になった気分で、何となくうれしくなってきました。

たくさんの人がぼくのまねをして、夜道はたくさんの、歩くイルミネーションが見られるようになりますように。

福井県越前市花筐小学校

三年

福岡ふくおか

碧衣あおい

## 交通安全について

毎日、新聞やテレビで交通事このニュースを見たり聞いたりします。車と車のしょうとつ事ごだったり、歩いている人を車がはねてしまったり、車が物にぶつかってしまったり、いろんな事ごがあります。わたしがいやだなあと思うニュースは、同じくらの小学生が学校に行くとき中や帰り道で車にはねられて、ケガをしたりしてしまったりする事ごです。そんなニュースを見ると、自分も同じようになったらこわいなあと思います。

わたしのお父さんとお母さんも車のうんてんをします。お父さんは、とっても安全うんてんで、スピードもあまり出さないし、らんぼつうんてんはしません。でもお母さんは、いつもいそがしいからか、スピードもちよっと出すし、しん号が黄色になっても

「行ける、大じょうぶ！」

と言つて、行つてしまふのであぶないなあと思つことがよくあります。

でも車にのつていてはん対に、自てん車にのつている人や、歩いている人をあぶないなあと思つたりすることもあります。それは、高校生の人たちが二列になつてしゃべりながら自てん車にのつていて、車が来ても知らんぷりをしていることや、お年よりや子どもが、大きな道路なのに横だん歩道をわたらないで、道路をななめにわたつたりするのを見たときです。

だから、車をうんでんしている人だけじゃなくて、自てん車にのつている人や、歩いている人もちゃんとマナーをまもらなければ交通事こにつながるんだと思ひました。

わたしが交通事こにあわないために、まもらなければならぬことは、左右の安全かくにんをしつかりして、横だん歩道をわたる。友だちが道の向こうでよんでいてもきゆうにとび出さない。車が来る直前や通つた直後、止つている車の前や後からとび出さない。車があまり通らないからといって、道

路であそばない。これらのことをしつかりまもろうと思ひます。四年生になると、自てん車ものれるようになるので、まだまだちゆう意しないといけないうことや、まもらなければならぬことがふえるから大へんだけど、それをしつかりまもらないと交通事こにつながるので、わたしは今から気をつけようと思ひます。

兵庫県宍粟市立道谷小学校

三年

おおた

ひかる  
光

## ひょうしきもちゃんと見てね

みんなが知つていようで、あんがい知らない交通ひょうしきにぼくはきょう味がありました。そこで、ぼくは今年の自由研究で、道路ひょうしきを勉強しました。実さい見てみたり、本で調べました。いつも見なれているひょうしきもあれば、  
「これ、なんだろ。」

と思つひょうしきもあります。面白いのは、おきなわにあるカニの絵の「カニに注意！」だそうです。カニが道を行くかなとふ思ひに思いました。北海道には、牛の絵の「牛に注意！」のひょうしきもあるそうです。ぼくは今年、和歌山へりょ行に行きました。その時に高そく道路でのししの絵の「いのししに注意」がありました。全国には、いろいろな動物のひょうしきがあるのだと思いました。

ぼくのお父さんやお母さんは車のうんてんをします。一しよにのつていて、ぼくは、いろんなひょうしきを見ます。よくみるのはさい高そくどのひょうしきで、40 kmや50 kmのひょうしきです。その時ちよつとお母さんたちのうんてんのそくどを見えています。ちよつとオーバーになりそうな時があります。

「お母さん50 kmすぎそうです。」

とぼくがいうと、お母さんは、

「そうやな」

と言います。そして、

「光はいろんなひょうしき知つとつな、ちゃんと守らないとあかんな。」

と言います。ぼくも全員に守つてほしいと思つてます。道路ひょうしきを守ると、交通事をおこなないようになると思つので、きちんと守つてもらいたいと思います。そのことをお母さんにいうと、

「そうやな。交通事をおこなしたら、かなしいことばかりで、いいことないもんな。お母さんも気をつけるね。」

と言つてくれました。うれしかったです。みんながきちんとひょうしきや交通ルールを守れるといいなと思つていました。

愛媛県四国中央市立上分小学校

三年

安藤 隼 あんどう しゅん

## 自転車けんてい

三年生になって、自転車けんていに合かくするよう  
に自転車の練習をたくさんしました。とくに手しん号

がむずかしかったです。手しん号をするとかた手運転になるので、こけそうになります。こわかったので、そこはゆっくり行きました。自転車けんていは何とか合かくしました。でも、お母さんは、一人で自転車に乗ることをきよかしてくれませんでした。おばあちゃんの家へ行く道で何度か練習をしました。いつも後ろから、お母さんに、

「もつと左。」

「そこは止まりなさい。」  
と言われました。

何度も練習をして、一人で自転車に乗っておつかいに行くきよかが出ました。うれしかったけど、少しこわかったです。

家を出発してからずっと下り坂で、曲がり角の向こう側は見えなくてびっくりしました。下の道は左に小川があつて、落ちそうになりました。でも、いつも止まれなかった所はきちんと止まることができました。坂をくだると、おばあちゃんの家にとouchやくしました。touchやくした時はほつとしました。

自転車のルールを守ることができたので、今回のお

つかいはぼくにとつては、九十点ぐらいでした。十点マイナスの理由は、まがり角をよく見ていなかったからです。もつとスピードを落として、左右をかくにんしたいです。

ぼくの家近くの大きな交差点は、事が多いです。前はトラックと自動車正面しようとしていて、自動車はボロボロでした。ガラスはわわわわいてとてもこわかったです。この交差点では、車と自転車の事も多いそうです。ぼくはしん号が青でも、一回止まってからおうだん歩道をわたります。そしたら、車の人が自転車の人を見つけてくれてぶ事にわたれると思います。

自転車は歩くよりもとても楽で気持ちいいです。ぼくはまだ近くのおばあちゃんの家しか行けないけど、安全に気をつけながら、友だちの家や図書館に行けるようになりたいです。

## 目を使って交通安全

「耳がきこえないんだから、ふつうの人より、周りをよく見て注意しながら歩かないとあぶないよ。」

これは、幼稚園生の時から、母に口うるさく言われてきた言葉です。私は、聴覚に障害があるため、後からの音があまり聞こえません。

以前、買い物に出かけた時に店のちゅう車場でカートをおして歩いていると、後ろから急に車が走ってきて、それに気付かず事故にあいそうになったことがあります。また、私は小学四年生になって、自たくとスクールバスを一人で登下校しています。横断歩道をわたろうとしたら、曲がり角から急に車が来て、あわててもどつたこともありました。とてもこわい思いをしたことを覚えています。このようにあぶない経験をして、母が言っていたことがわかりました。

交通安全について、いつも家族と話し合っていることがあります。横断歩道や道を横切る時には、左右だけでなく後ろもよく見て車がこないかどうか確認してから、手を挙げてわたること、また、自分が注意して歩いていても、急に車が飛び出してきたりするので、「ここはだいじょうぶ。」などと油だんしないで歩くことです。また、きこえにくい私にとって、周りがある時にクラクションを鳴らされてもきこえない時があるのです。周りを注意深く見ることも大切です。

きこえる人は音をたよりに危けんを察知して自分の身の安全を守ることができます。しかし、私はきこえにくいので、音による情報をとることがむずかしいです。そのため、周りをよく「見る」ことが必要になります。これから大人になるにつれて、一人で歩く機会がますます増えていきます。交通ルールを守り、目を使って交通安全を心がけたいと考えています。

## 自分へのちかい

四年生になって、わたしは、はじめてめんきょしゅうをもらいました。それは自転車の運転めんきょしゅうです。これで家の人といっしょでなくても、学校区の中なら一人で自転車に乗ることができるようになりました。わたしは、とてもうれしくて毎日のように自転車に乗っています。

この前、お母さんと自転車で少し遠くまでお買い物に行きました。わたしはめんきょしゅうをもらって手に自転車に乗れるところを、お母さんに見てもらいたくて、交通教室で教えてもらった通りに乗って見せました。お母さんにもほめられたので、グイグイスピードを出してこいでしまいました。今まで気を付けて通っていた道路も、スピードが出ていると、ぜんぜんちがう道路を通っているようでした。お母さんに「ス

ピード出しすぎだよ。」と注意され、ハッとしました。めんきょしゅうをもらったんだからと、ゆだんをしていたことに気が付きました。もし、一人だったら、止まれのマークや白線に気が付かなかつたかもしれません。もしかすると交通事故は、こうしたゆだんや、このくらい平気という気持ちのゆるみが、原いんなのかもしれなあと思いました。自転車の運転めんきょしゅうをもらったということは、今までよりも、もっと気をつけて乗るといふことなんだなあと思いました。

わたしは自分でも、こういう思いをしたのでテレビで流れる交通事故のニュースをよく見るようになりました。あるニュースでは自転車に乗る人のマナーが悪いという話をしていました。けいたい電話をいじりながら乗っている人、かた手だけで運転をしている人など、おどろくような乗り方をしている人が本当にいいことを知りました。この人達もきつと、今まで大きな事故を起こしたことがないから今日も大じょうぶというふうに思っているのだと思います。でも、見ていても事故を起こさないのが不思議なくらいあぶない乗り

方なのです。そして、今は自転車に関係する事故が、すぐくふえていて、ひ害にあった人も重体になったり、こついしようといって完全に治らないほどの大きなケガをしてしまった人がいることを知りました。

今まで歩くことが多かったけれど、自転車に乗ることがふえて、自分の不注意で事故を起こしてしまう側の立場になったという事を、真げんに考えました。交通教室でも習いましたが、たった一つの命を大切にするように、決められたルールをきちんと守り、自転車運転めんきょしようの意味をわすれないように気を付けて乗りたいです。

岡山県倉敷市立中洲小学校

四年 清板 せいた 梨央 りお

## 交通事故が教えてくれたこと

風が強い雨の日。わたしは、交通事故にあった。ま

さが自分が交通事故にあうなんて、思っていなかった。習いごとに行くために、横断歩道を渡っていたときだった。信号は青。はげしい雨にぬれないように、かさを左ななめ前に向けていた。横断歩道を渡りきる直前、わたしの左かたが曲がつてきた車とぶつかり、転んでしまった。車はそのまま進み、少し先で止まっているのが見えた。わたしは、折れたかさを拾って、車まで歩いた。

「けがはないか。」

と、おじいさんが言った。わたしは、

「大きなけがはないです。でも、足がいたいです。お母さんに電話します。」

と答えた。おじいさんは、少しこまったような顔をしたけど、わたしはすぐに、お母さんに電話をした。

「車とぶつかった。」

こわくて、泣きながら事故の話をした。しばらくすると、横断歩道の向こうに、お母さんのすがたが見えた。わたしは少し安心して、お母さんの方へと近づいて行つた。すると、その間におじいさんはいなくなっていた。



お母さんと近くの交番へ行つて、事故のことを話した。

「ひき逃げだ。」

と、交番の中が急にざわざわし始めた。けい察官に、車や運転手の持ちようを聞かれたけど、わたしは「小さな白い車」で「しらがまじりのおじいさん」ということしか覚えていなかった。どうして、おじいさんはいなくなったのか。とてもふしぎだった。

幸い、わたしのけがは軽かった。でも、けがの大きさに関係なく、けが人を放つて逃げたら、「ひき逃げ」という罪になるぞうだ。けい察官は、事故現場で車一台一台に声をかけて、事故のことをたずねた。でも、事故を見た人も、おじいさんも見つからなかった。

どうして、こんな事故が起つてしまったんだろう。何に気をつければよかつたのかを考えた。わたしは、青信号に安心して、かさの向こう側をちゃんと見ていなかった。おじいさんは、わたしが横断歩道を渡り終わるのを待たずに曲がつた。おたがいがきちんと安全をかくにんしていれば、きつと事故は起こらなかつたと思つ。

事故は、つらい出来事だったけれど、わたしにたくさんのお母さんやおばあちゃんに、命と健康の大切さを教えてくれた。事故のおそろしさ。命と健康の大切さ。家族の思い。そして、まさか自分が：というあまり考え、そんな考えのまま行動していたら、いつかもつと大きな事故にあつていたと思つ。そうなる前に、もう一度交通安全について考えることができたら。横断歩道を渡る時、自転車に乗るとき、どんなときも「もしかしたら」と思いながら行動している。

鹿児島県鹿児島市立星峯東小学校

四年

おおしま  
大島

かずのり  
千典

## 気をつけてね

「行つてらっしゃい、気をつけてね。」

「交通事故にあわないようにね。あせらないで行くんだよ。」

「ほぐが、出かけるときにお母さんやおばあちゃんか

ら、よく言われる言葉です。どんなにいそがしくても、お母さんやおばあちゃんはずいぶん言っていてぼくを見送ってくれます。

いつも聞いている当たり前の言葉だけど、言われると、ぼくは、「そうだよな。ゆっくり、ゆっくり、右、左、右」と自分に言い聞かせることができます。

夏休み、ぼくは一年生の弟と二人でよく学校の図書室に行きました。弟は、うれしくてよく走るので、ぼくは心配でした。だから、横たん歩道をわたるとき、ぼくは、

「たかみ、気をつけて。」

「手をしっかりあげて。たかみは小さいんだから手をあげて大きく見せないとな。車の運転手さんからは、よく見えないよ。」

「はい、いつしよに。右、左、右、ゴー。」  
と声をかけてわたりました。学校の交通教室で習ったことです。

でも、弟にえらそうに言っているぼくも、前にこわい目にあつたことがあります。その日は、学校で友達と遊ぶやくそくをしていました。でも、兄弟げんかを

してしまって、家を出るのがおくれてしまいました。ぼくは、あせつてしまいました。遊ぶことや友達のことしか考えていませんでした。家を飛び出て、

「キツ、キー。」

ぼくは、はつとしました。目の前に曲がってきた車がありました。運転手さんは、ちよつとこわい顔をしていました。ぼくは、少しだけ頭を下げました。心ぞうがドキドキして、足がガクガクしました。この時、ぼくは、「もし、車とぶつかつていたら今ごろ……。」と思つて、こわくなりました。急いで家を出てしまったことを反せいしました。

だから、今、ぼくは毎朝、家族がいつてくれる

「行つてらっしゃい、気をつけてね。」

という言葉を、「うん、ありがとう。」という気持ちで聞きます。そして、

「行つてきます。」

と言葉を返し、家を出ます。

「行つてらっしゃい、気をつけてね」は交通事こにあわないための家族からの大事な言葉だと思います。そして、「今日も一日元気ががんばつておいで」という

家族からのメッセージなのかなと思います。ぼくに

とつても、心を落ち着けるための大事な言葉です。これからも、あせったり、いらいらしたりしていても、

この言葉を思い出し、心を落ち着かせて気をつけていきたいです。

栃木県佐野市立城北小学校

五年

秋野 あきの

恵理 えり

## もっと知りたい交通ルール

「ビュン、ビュン、ビュン。ドドドドド。」

大きな音を立てて、わたしの右側を何台もの車が、一しゅんで通りすぎていきました。わたしはその時、どこもの国から自転車に乗って、家に帰ると中でした。ヘルメットをかぶり、道路の左側を、びくびくしながら自転車で走っていました。白線の内側はともせまく、はみ出さないようにしん重に走りました。側このふたのすき間にハンドルがとられ、よろけそうにもなりました。とにかく、車にぶつかからないように気を付けて走りました。

もし、車にぶつかったら、交通事故になってしまい、大けがをしてしまうかもしれません。とても、こわいんです。ぶつかった車を運転している人にも乗っている人にもめいわくをかけてしまいます。もちろん、家族

にも大きな心配をかけてしまいます。

やっとの思いで家に着くと、母に、

「ルールを守りながら、自転車に安全に乗っていたね。」

とほめられました。その時、なぜ知っているのかと最初はびっくりしましたが、母は、妹のプールのむかえの帰りに、わたしを見かけたそうです。ほめられて、とてもうれしかったです。

でも、夕方に自転車に乗っていて、とてもこわい思いをしたので、自転車のルールについて調べてみることにしました。すると、わたしの知らないルールもありました。例えばこんなことです。

「歩道は子ども・高れい者しか走ってはいけない。また、通行可能の標識がある歩道しか走ってはいけない。歩道を走るときは車道側を走る。二台以上横にならんで走ってはいけない。」

というルールです。こんなルールがあるなんて知らなかったのです。これからは、今まで知らなかったルールもしっかり調べて覚え、交通事故にあわないようにしていきたいと思います。

「だれも見えてないからいいや。」

という気持ちですが、交通事故につながるのではないかと思います。例えば、信号が赤なのにわたってしまったり、ヘルメットをかぶらないで自転車に乗ってしまうとかいうことです。車も、自転車も、大人も子どもも、いつでもきちんとルールを守っていけば、交通事故は起きないと思います。また、夕方に自転車に乗っていてこわい思いをしたことから、交通事故は、ルールだけではなく、周りの様子も関係があることにも気付きました。運転する人の気持ちや周りの条件の重なりによって、交通事故につながってしまうこともあると思います。みんながルールを守り、交通事故のない社会を目指して行けたらいいなと思いました。

## みんなでもっと考えよう

みなさんは「自分が加害者になる」という事を考えた事がありますか。わたしは今まであまり考えた事ありませんでした。

わたしが自転車で出かける時に、母はいつもきまつて、

「とび出したらあかんで。スピード出しすぎひんようにしいや。」

と言います。わたしはそのたびに事故にあわないように、自分の身を守るために言ってくれているんだと思っていました。

最近テレビで「十才の男の子がおばあさんを自転車でひいた事故」の事を知りました。私と同じ十才の子が事故の加害者になって、さいばんになってる事にびっくりしました。男の子は、習い事に行く途中の坂

道をもうスピードで下っていておばあさんにぶつかったそうです。おばあさんは、意識不明になり今もねたきりだそうです。それを知った時、わたしが習い事へ行く時と、とてもにていると思いました。いっしょにテレビを見ていた母に、

「ゆなは安全運転してるの。同じ十才の子やけど。」  
と言われ、びくつとしました。わたしも自転車で坂道を下っていく時に、少しスピードを出しすぎかな、と思う事があったからです。それに時々、友達のおしゃべりに夢中になりながら自転車をこいでいて、人にぶつかりそうになった事もあったからです。

その後、母がいつも言ってくれていた言葉には、自分の身を守るためだけではなく、自分が人をひいてしまわないようにという意味がこもっている事を教わりました。

自分がひ害者になって大けがをしたりねたきりになるのも、加害者になって、きずつけた人の事を気にしながら生きていくのも、両方の人の人生が不幸になっ  
てしまいます。

だから、交通安全について日本全国の人々がもっと

強い思いをもって事故をなくしていかないといけないと思います。そのために、まず自分ができていないことや気をつけないといけないと思う事を考え、直していいことと思います。そして、身近な人から命の大切さを伝えていきたいと思います。

和歌山県和歌山市立名草小学校

五年

柏野 かしの

陽音 はると

## 横断するとき気をつけること

毎朝、僕のお父さんは、「ご飯を食べているぼくたちに、「交差点は？」と聞きます。そして、ぼくたちは「止まる」と答えます。次に、「そして？」と聞くので、ぼくたちは、「車を運転している人の目を見る。」と答えます。弟は、楽しそうに答えます。けれど、ぼくはもうわかってるって。五年生なんだから毎日聞かなくても、一回聞けば覚えてるのにも思いつながら答えてい

ます。

夏休みのある日の朝、お母さんが、新聞を読んで、ひき逃げ事件があったと教えてくれました。この事件は、横断歩道を自転車で渡っていた小学六年生の女の子が、左折してきた大型クレーン車にはねられ、亡くなった事件です。

ぼくは、新聞を読んで、クレーン車の運転手が、「何かに乗り上げた気がした。」と話しているのが変だなと思いました。どうして女の子がいることをわからなかったんだろう。変なかんじがしたのなら、どうして止まって確にんしなかつたんだろうと思いました。そして、女の子に気づいていれば、事こになっていなかったかもしれないと思いました。気づいてもらうことがすごく大事だと思いました。

そして、ぼくは、運転手さんから気づいてもらう方法を考えました。それは、ぼくから運転手さんの顔を見ることがです。そうすると、運転手さんが何をしているかがわかります。最近、けい帯電話やスマホを使いながら運転している人もいます。それに、ナビやラジオのスイッチをさわっていたり、よそ見をしたりし

ながら運転している人もいます。そんな様子を見ると、何も見ないで横断歩道を渡ってはいけないと思います。

ぼくが運転手さんの顔を見て、目が合えば、運転手さんからもぼくが見えているはず。そうすれば、ぼくに気づいてもらえるし、事にならないと思いましたが。

そのとき、ぼくは、この方法はお父さんが毎朝言っていることだと思いました。そして、守れていなかったと反省しました。ぼくは、これからどこへ行くときもこの方法をしていきたいです。お父さん、毎朝言うてくれて、ありがとう。

和歌山県 私立智辯学園和歌山小学校

五年

納田のうだ

倫希ともしき

## 我が家の交通安全

ぼくと、ぼくの弟は、車に乗ると、条件反射の様に、シートベルトをしめます。だからたまに友達のお父さんやお母さんの車に乗せてもらうと、ぼく達が何も言われないのに、すぐにシートベルトをしめていることに、驚かれます。

「子供が泣いたり、嫌がったりするから。」とか、

「いちいちチャイルドシートに乗せるのが面倒だ。」という理由で、赤ちゃんや子供にシートベルトをしめさせずに車に乗せている人が今もとても多いのだと聞きました。

ぼく達が、シートベルトを自分からしめるようになったのは、元警察官だった祖父のおかげです。

祖父は、ぼく達が赤ちゃんの時は、母に、シートベ

ルトの着用を、厳しく指導し、ぼく達が自分でシートベルトをしめられるようになってくると、ぼく達にシートベルトの大切さを教えてくれました。

元警察官だった祖父は、仕事で、たくさんの方の悲惨な事故を見てきたので、普通の人は、

「事故なんて人ごと。私は大丈夫。」  
と思っけても

「事故は必ず起きるもの。」

と考えています。だから、ぼく達にも、車に乗る度、「シートベルトしめて！」

と、しつこく言ってくれました。そして、シートベルトをしめるまで、車を動かしてくれませんでした。

こうした徹底した祖父の教えのおかげで、ぼく達は、車に乗ると、必ずシートベルトをするようになったのです。

車に乗っていると、隣を走る車の窓から、中の様子が見えることがあります。すると、携帯電話で話しながら運転をしている人、シートベルトをしていない人、子どもをチャイルドシートに乗せずに、ひざの上に抱っこしている人など、大切なルールを守らずに車に

乗っている人の多いことに、驚いてしまいます。きつと

「自分だけは大丈夫。」

だと、油断しているのでしょうか。でも、その油断が、自分や、大切な人の命を奪ったり、体や心を傷付けたりしてしまうのだということに、気付いてもらいたいと思います。

一人一人がルールを守って、悲しい事故が起きなくなればいいのと思います。

岡山県倉敷市立葦高小学校

五年

おおはま  
大濱

あずみ  
杏実

## シートベルトの大切さ

私はこの夏休みに、生まれてはじめて交通事故に合いました。

八月十七日、この日はフットベースボールの大会の



日で、朝四時に起きて暗いうちにお父さんの車で家を出ました。後ろの席でぼんやりしていると、お父さんに、

「後ろの席でも、ちゃんとシートベルトをしないで。」と言われました。私は助手席でもないし、高速道路でもないのに、シートベルトは、きゆうくつでいやだなあと思いつつながら、言われる通り、シートベルトをしました。

その五分後、二号线バイパスで信号待ちをしていると、

「ドーン。」という大きな音と同時に、車が大きくゆれて、その直後に頭の後ろから、たくさんのガラスのはへんがぶつてきました。

とまっていたお父さんの車に、ブレーキをかけずに車がぶつかってきたのです。

私はびっくりして泣き出しました。いたくはなかったけど、何が起きたのか最初わからずに、こわくてしかたなかったからです。

お父さんが、あわてて、  
「大じょうぶか？ どこか打ってないか？」

と聞いてきましたが、私はまだわからなくて答えられませんでした。

けいさつの人が来て、相手の人やお父さんと話している間に、少しずつ落ちついてきました。

お父さんから運らくを受けて、お母さんがむかえに来てくれたので、車からおりて乗っていた車をはじめ見てびっくりしました。車の後ろは大きくへこんでいて、後ろのガラスはわれてなくなっていました。ドアも開きませんでした。

お母さんの車に乗りがえて、大会かい場に移動する間、お母さんは、

「シートベルトをしてて本当によかったね。」と言いました。体はどこもいたくなくケガもしなかったので、試合にもそのまま出る事ができました。

お父さんは運転が上手なので、今まで車で事故を起こすとは思ったことがありませんでした。

でも、いくら自分が交通ルールを守っていても事故はいつ起きるかかわからないことが、よく分かりました。あの時も、シートベルトをしていなかったら、私はぶつけられた時、前にとび出して、頭や顔を思いっ切

り打って大ケガをしていたかもしれません。

シートベルトは、私の体を守ってくれたんだなあと  
思いました。

安全だと思っけていても、いつどこで事故に合つのか  
分かりません。だからシートベルトは車に乗つたら必  
ずしないといけないと思います。

シートベルトは私たちの命を守ってくれるベルトな  
のです。

これから車でいろんな所に行くと思つので、シー  
トベルトは必ずつけようと思ひました。そして、周り  
の友だちにも、シートベルトの大切さを教えていこう  
と思ひます。

福島県いわき市立湯本第一小学校

六年 小笠原 おがさわら

夏海 なつみ

### 命を守るベビーシート

今年の六月十三日に私のいとこが生まれました。と  
ても小さくてかわいい赤ちゃんです。赤ちゃんが病院  
から退院して私が初めて赤ちゃんに会える事になつた  
日、赤ちゃんは車の後部座席に後ろ向きに取り付けら  
れたベビーシートといういすに一人で乗せられてやつ  
て来ました。私はそれを見た時、生まれたばかりでま  
だ体もすごく小さいのにどうして一人であんなシート  
に乗せなくてはいけないんだらう、どうしてだつとし  
てあげないんだらうと何だかわいそうだなと思ひま  
した。

それから何日か過ぎて、私が母と買ひ物に行つた帰  
りに信号待ちをしていた時の事でした。反対車線の向  
こう側から、赤ちゃんをおんぶしたまま運転している  
どこかのお母さんが通り過ぎて行きました。そのお母

さんは後ろに赤ちゃんがいる分、少し前のめりになっていて何だか運転しにくそうでした。すると、それを見ていた私の母は、

「あれじゃ、赤ちゃんが危ないよね。かわいそうだね。」  
と言いました。私が

「どうして赤ちゃん危ないの。」  
と理由を聞きました。すると、

「だって、もし車の前に急に人が飛び出してきて、車の人が急ブレーキを踏んだら、おんぶされている赤ちゃんはどうなると思う。」

と、今度は母が私に問いかけてきたので、私はブレーキを踏んだ時に自分の体がどうなるのかを考えてみると、すぐにはっとしました。

普通にブレーキをかけた時でも、乗っている人の体は最初に前に押し出され、次にその反動で背中がシートに打ちつけられます。それが急ブレーキだったらもっと強い力が加わって、赤ちゃんはお母さんの背中和シートの間にはさまってしまいます。

「赤ちゃん、つぶされちゃっう。」  
と母に言つと、母はうなずいて、

「だつこでも同じだよ。」  
と言いました。

私は、とても小さくてかわいいところが、一人でベビーシートに乗せられていた時の事を思い出しました。あの時は、かわいそうだなと思っただけで、本当にかわいそうなのはシートに一人で乗せられている事ではなくて、車に危ない乗せられ方をして命を危険にさらされている事だと思いました。そしてベビーシートは自分で自分の身を守れない赤ちゃんの体や命をもしもの時に守ってくれる大切な物なんだという事に気がきました。

もし、これから小さいとこが大きくなってベビーシートやチャイルドシートに乗るのを嫌がった時には、私はこの話をやさしく教えてあげようと思います。そして自分も自分より小さい子の良いお手本になれるように、これからも車に乗る時はまず最初に必ずシートベルトをしめるようにしたいと思います。

## 実験から得られたこと

「行つてらっしゃい。事故には十分気をつけるんだよ。」

私が自転車に乗って出かけるとき、家族はいつもの言葉で送り出してくれます。私は、当り前のあいさつのような言葉だと受け止め、深く考えたことはありませんでした。しかし、ある日、この言葉が、深い意味のある言葉として私の心に刻みこまれることができなくなりました。

「キキーツ。」

自転車の急ブレーキの音。私が自転車に乗って友達といっしょに坂道を下っていたときのことでした。真正面から歩いてきている人と私はぶつかりそうになつてしまったのです。私の運転のしかたが悪かったのが原因でした。片手に荷物もち、片手運転をしていた

ため、ブレーキをかけるタイミングがおそくなつてしまったのです。幸い、その歩行者とぶつかることも、私が転ぶこともなかったのでよかったです。あの時の歩行者の方のおどろいた顔、そして私が味わった恐怖は今でも忘れることができせん。家族がいつも言ってくれている「事故には十分気をつける。」という言葉の意味が、この経験を通して初めて分かりました。

そして一年後、両親から、ある自転車事故の話を聞く機会がありました。小学生が運転していた自転車にぶつけられてしまった人がいまだに意識がもどっていないという話でした。この話を聞いて私はゾツとしました。あの日、もしかしたら私も加害者になつていたのかもしれない。どうして私はあの時片手運転をしてしまったのだろう。交通事故の恐ろしさをさらに意識させられました。自転車の事故は、いつも子供が被害者になると思いこんでいましたが、加害者にもなるということに初めて気付きました。

私は、来年は中学生になり、毎日自転車で登下校します。今よりも自転車で乗る機会が増えてきます。「事

故には十分気をつける。」という言葉の意味、そしてあの日に起こしてしまった私の失敗、さらに、自転車を運転する私たちも加害者になる可能性があること。これらのことを決して忘れることなく、安全に楽しく自転車で乗りたいと思います。

埼玉県本庄市立北泉小学校

六年 清水 那奈

## 北小、絶対優勝するぞ！

「足はつきません！ 線はふみません！」私達は、この言葉を毎日言っってはげまし合い、六月の埼玉県交通安全自転車大会に参加しました。この経験が、交通安全についてよく考える良い機会になったと思っています。

最初は、楽しそうかなと軽く考えていたのですが、いざ練習を始めると想像以上に大変な毎日でした。ま

ずは、実技、この競技はジグザグ走行や、遅く乗る走行など色々な走行方法があり、見ていると簡単そう、と甘く見ていたら実際にやってみると、「遅のりは25秒以内に乗れない、ピンはたおしてしまつ。」などと、とても苦労しました。もう一つは、学科の勉強です。毎日やりましたが、最後にはものすごい厚さの量になりました。むずかしいし、時々疲れて、練習や勉強をやめたいと思つた時もありました。そうした中で学んだ事があります。

交通安全のルールは、信号を守るとか、歩行者は右側を歩くとか、簡単な事は知っていました。勉強して分かってきたのが、まず道路に出てよく見ていると、色々な所に標識があります。そして、それは一つ一つに意味があり、一枚の中にいくつかのルールが、入っている場合もあります。何故、ルールが必要かということ、それがないとそれぞれ勝手な行動をとって、事故になったり、ケガをしたり、周りの人に迷惑をかけたたり、悲しませる事になるかもしれません。自転車の乗り方に見ても、とにかく周りを良く見る事です。事故を起こさない為に、私達は交通ルールを守らなく

てはいけないと改めて感じました。

自転車大会では、学科の筆記試験、安全走行の実技試験を各学校四名の、総合得点で順位が決まります。応援もみんな良く声が出ていたし、みんなとても頑張りました。結果は、六位で、もう少し上の順位にいきたかったのですが、残念な気持ちにもなりました。でも、二ヶ月近くの間、沢山の人の協力や応援があり、泣いたり笑ったり、他の仲間と頑張ってきてもらえた六位だと思っています。

自転車大会で学んだ事は、交通安全や自転車の乗り方、などはルールがあり、それをみんなが守る事がとても大切です。そして、何事にも努力して頑張る事。力いっぱい頑張ったなら、どんな結果にも満足できるという事を感じました。忙しかった練習が終わって、しばらくの間は少しさびしく思いました。あの二ヶ月近くの経験は、忘れられない良い思い出になっていくと思います。お世話になった方、全員にも感謝の気持ちを忘れずにいたいと思っています。それと、一緒に頑張った仲間達がいてくれて、本当に良かったです。みんなが、交通ルールを守り、事故のない明るい未来

になっていけたらいいな、と思います。

千葉県茂原市立豊田小学校

六年 矢部 智史

## 当たり前前の交通安全

僕の家から学校まで、四キロぐらいある。特に危険なところは、ふみ切りと交通量の多い道路だ。ふみ切りを横切る時に、とつ然警報音が鳴り出して、どきどきとあわててしまうことがある。スピードの速い車が、僕たちすれすれに通り、ひやっとすることがある。そんな思いを、何度も経験している。安全に学校に行くのは、簡単なようで、意外と大変だ。

こんな僕たちの安全を、毎日見守ってくれる人がいる。僕のおじいちゃんだ。おじいちゃんは、「車が来たら、ひかれるかもしれないし、智史のせいで事故がおきるといけないから、内側に入って！」と言ってく

れたり、横断歩道を渡る時は、「ぐずぐずしちゃダメだよ。信号が変わっちゃよ。」と呼びかけたりして、僕たちのことを支えてくれている。僕が話すのに夢中になって、歩きながら続けていると、「智史、車の音が聞こえないから、やめな。」と言ってくれる。また、ふみ切りでは、絶対に遊んだり、ふざけちゃダメだよ。電車にひかれたら、助からないんだからね。」と教えてくれた。こうして、当たり前前のごとのほとんどは、おじいちゃんに教えてもらった。危ないこと、気をつけること、守らなくちゃいけないこと、たくさんのごとを、何度も何度も注意されて、身につけてきた。僕は今、登校班の班長。おじいちゃんに何か言われることも少なくなり、班のみんなに、「話し声がうるさいよ。」とか、「車道に出すぎだから、歩道の中に入って。」とか、「後ろから来る車に気をつけて。」と、注意する立ち場になった。そうやっておじいちゃんに教わった交通安全を、みんなに伝えている。

僕は、おじいちゃんのおかげで、当たり前前の交通安全を身につけた。もし一緒に歩いていなかったら、何が危ないかわからないまま、大きくなっていったかも

しれない。知らずにいることが一番危険なことなの…。だから、僕は、この六年間、毎日歩いてくれるおじいちゃんに感謝している。おじいちゃんから教わったことを、絶対に忘れない。

来年、中学生になる僕。登校班もなく、一人、自転車で通学する。きよりも長くなるし、危険な場所も多くなる。重たい荷物を自転車に乗せて、暗い時間に、帰宅するのは心配だ。でも、おじいちゃんに教わった交通ルールが変わるわけではない。当たり前前に注意をして、当たり前前に守っていることが、一番の安全につながるはずだ。

徳島県鳴門市板東小学校

六年

谷崎 たにざき

和広 かずひろ

## わが家の交通安全

毎日の生活の中で、自分で歩く以外は、必ず何かの

乗り物を使っている。一番身近な乗り物は、自転車。兄さんのお下がりの自転車で、ぼくは、出かけるのが大好きだ。ストレス解消にもなるので、おもしろい。時々、中学二年の兄さんと、ぼくとで、近所のコンビニまで、一緒におやつを買いに行くことがある。家を出る時は、毎度のように決まって、「安全確認を忘れたら、あかんですよ。」と、お母さんに、言われている。小さい時からの習慣で、聞き慣れてしまっている。けれども、ぼくは、その言葉が、うるさいと思ったことは、一度もない。それは、毎日のように、テレビで、交通事故のニュースを見ているからだ。ぞくぞくと、する時がある。

いつもは、遠出をする時は、お母さんの運転する車で、出かけることが多い。座席に着くと同時に、すぐにシートベルトに手が行く。ぼくは、チャイルドシートトの時代から、ずっと、ベルトを着ける習慣があるので、苦痛にもならないし、めんどくさいと思つたこともない。ほんの少しのことでも、習慣にしていることは、自然に身についてしまっている。

また、すれ違う車で、いろいろなことをやりながら、

運転席に座っている人を見かけることがあって、びっくりしてしまう。けい帯電話で、話しながらや、メールをしたり、もっと、びっくりしたのは、新聞や本を見ながら、フラフラと車が走っているのを見た時は、しよう突してしまうのではないかと、ひやっとした。交通事故は、自分だけが、きちんとしているだけでは、防ぐことは、とても、難しいと思う。周囲の人や車は、今、どんな状態か、何をしているか、見るが大切だ。それから、気分がすぐれない時や、健康に自信がない時も、車を運転することは、やめておいたほうがいいと、ぼくは思う。

ぼくの家では、たまに、列車で出かけることがある。お父さんは、毎日、マイカー通勤なので、「人に乗せてもらうのは、楽ちん。」と言って、楽しそうにしている。「気持ちが悪くし、おしゃべりも楽しいなあ。」と、笑っている。お父さんも、お母さんも、列車の時は、ほっとした表情に見える。やっぱり運転する時は、きん張するんだなあと思う。ぼくは、大人になって、車の運転ができるようになったら、家族で、運転を交代しながら休けいをしながら、楽しい旅行に



出かけてみたいなあと思う。

交通事故が起こらないようにするには、時間や心にゆとりを持って、早めに出発することが大切だと、ぼくは思った。家族全員、笑顔で、出かけることは、すばらしいし、事故防止にも、つながると思う。



# 中学生の部

# 最優秀作

内閣総理大臣賞

宮崎県児湯郡新富町立富田中学校

二年

門田 かどた

桃子 ももこ

## 優しさのベルト

「あいちちゃんの席に座る。」

そう言つて妹は、きちんとチャイルドシートに座る。しかし、初めからそうだったわけではない。最初の頃は嫌がつて泣いてばかりいたのだ。となりに座る私が辛くなるほど、妹はチャイルドシートを嫌がり、体を反らせて泣いていた。私はそれを見て、「かわいそう、ちよっとくらの距離だし抱っこしてあげればいいのに。」と思つていたのだが、父も母も絶対に妹をチャイルドシートから降ろそうとはしなかった。

私が、なぜ両親はそんなにしてまで妹をチャイルド

シートに乗せようとするのかと、疑問に思つていき、宮崎は、チャイルドシートの使用率が全国でワースト四位だという記事を目にした。そして、使用しない理由に、「きゆうくつでかわいそうだから。」「ちよつとの距離だから。」とあつた。みんな私と同じ考えをもつているのだ。しかし、しばらくたつたある日、一つのニュースが耳に入ってきた。チャイルドシートをしていなかったために子供だけが助からなかった事故のニュースだ。ようやく私は、いくら泣いても、両親が妹をチャイルドシートから降ろさなかつたわけが分かつた。嫌がる子供を無理やりチャイルドシートに乗せるのはかわいそうだと思つていたけれど、何の罪も無いのに命を落とさなければならぬ子供の方が、ずっとかわいそうなのだ。

ニュースを聞いて母と話をしたとき、妹が早くチャイルドシートに慣れるようにと、母は一日二回、妹をチャイルドシートに座らせて車を運転していたことを知つた。最初は一回五分、しばらく続けたら十分と少しずつ長くしていき、一か月で一回十五分必ずチャイルドシートに乗せて運転したという。初めの頃は泣き

声に辛くなつたけれど、「命を守るためだから。」と心を鬼にして毎日続けたのだそう。そうして一か月が過ぎたころ、ようやく泣かずに二十分乗ることができるようになつたらしい。今では祖父母の家までの二時間、妹はチャイルドシートに座っていることができる。

泣いて嫌がる幼い子供を乗せて運転するのは、周りから見たらかわいそうな光景かもしれない。しかし、それを我慢させてでも、たった一つの命を守ってあげるのが、本当の大人の優しさなのだと思ふ。かわいそうだと子供をチャイルドシートに乗せない人は、今でもたくさんいるだろう。私は車を運転する全ての人に、チャイルドシートがどんなにたくさんの子供の命を救っているかと、本当の優しさは何なのかを知ってもらいたい。

母は今日も妹にチャイルドシートのベルトをかけるだろう。このベルトは、命を守る優しさのベルトだ。いつか、日本中の子供たち全員に、この優しさのベルトがかかることを、私は願っている。

## 優秀作

内閣府特命担当大臣賞

愛知県豊橋市立三川中学校

一年

西川 にしかわ

菜美 なみ

## 押し歩き活動

私の学校では今、通学路で工事をしています。そのため、自転車の「押し歩き」活動をしています。

押し歩き活動を始めた時は「めんどくさいなあ」「なんで自転車に乗っちゃダメなの」と押し歩きをする理由が分かつていませんでした。私は、工事が理由だよ。だから仕方ない」と軽く思っていました。

私は、この押し歩き活動を始めるまでは、周りを見ずにすごいスピードで自転車に乗っていました。でも、小学生の時のことを思い返すと、自転車で乗った中学生が小学生にぶつかりそうになるのを見かけたり、私

のすぐ横をすごいスピードで走っていく自転車に怖い思いをしたことを思い出しました。

でも、毎日自転車を押し歩きしているうちに、「こつて歩く人と自転車が一緒に通るとこんなにせまいんだ」、「自転車や車が見えなくて危ないな」と小学生や歩行者の気持ちが分かるようになっていきました。小学生の頃、怖いと思っていた自転車の乗り方を自分がしていることに気づき、すごくびびくりしました。私は、押し歩き活動がなかったら今でもあんな危ない乗り方をしていただんだと思い、すごく怖い気持ちになりました。それと同時に、今まで気付かなかった自分がとても恥ずかしいと思いました。

その日から私は、「せまい道路では押し歩きをする」「なるべくスピードを落とす」「このようなくことに気をつけながら登校しています」。

私は、押し歩き活動が始まってから、危ない所をたくさん見つけました。それと同時に歩行者や小学生の気持ちも分かるようになりました。去年まで小学校に行くのに怖い思いをしていました。自分が言われて嫌なことを言わないのと一緒に「自分が嫌だと思つたこ

とをやらない。」それが大切だということが分かりました。「言われるまで」「やるまで」「気づかなかった自分にとっても反省しています。それに、「工事が始まったから」という理由があつて気付いたのですが、「なんでもっと早く気付かなかつたらんらう」と思います。

一年生の他のクラスでは、「押し歩き」のポスターを作つて、みんながよく目にする廊下の壁にはっている人もいました。自分から進んで「押し歩き」や「交通安全」について話し合つたり、続けられるよう話し合えるといいなと思います。そして、工事が終わつて押し歩き活動が終わつても、みんなが「押し歩き」ができるようにしたいです。

## 「思いやり」でつくる安全

それは夏休みに祖父の家に向かう車の中で聞いたニュースだった。前日の晩に神奈川県の踏切で八十八歳の老人が、二十二メートルの踏切を渡り切れずに電車にはねられて亡くなったとの内容だった。私はその老人と八十三歳の祖父とが重なり、とても切ない気持ちになった。

私の家族は歩く速度がとても速い。それは歩くのが速い祖父の影響だった。そんな祖父だったが、最近はずが上がらなくなり、引きずるようにゆっくりしか歩けなくなってしまう。まだ杖がなくても大丈夫だが、少しの段差でも超えるのに一苦労だ。

祖父に会いに行くと、姉と私の三人で近くを散歩する。姉と二人なら直ぐに歩いてしまふ距離だが、かなりの時間を要する。それはゆっくり歩くことに加え、

高齢者にとつての危険を回避する時間が必要だからだ。たとえば、信号は必ず一度見送る。それは祖父が速く歩けなくなったことをあまり理解していない私達が、自分達の速度感覚で渡り始めてしまい、渡り終わる前に信号が赤になりヒヤツとしたことがあったからだ。それでも対向側から来る人が多いと速度がもっとおそくなり、渡り切れなくなることもあった。階段の上り下りが出来ないのも、歩道橋を利用せずに横断歩道を渡るしかないが、信号機のない横断歩道ではなかなか渡ることができない。停止してくれない車も多く、走行してくる車がかなり遠くでも祖父の速さでは危ないかもしれないと感じるからだ。歩道を歩いていても放置自転車避けながら歩くのは大変だし、ものすごいスピードでベルを鳴らしながら走行してくる自転車を避けて立ち止まったり、携帯の画面を見ながら歩いて来る人にぶつかりそうになったりと、様々な事が起きる。そのような時、私は心の中で、「なんて自分勝手だ。思いやりのない人たちのだろう」と呟く。でも祖父が普通に歩けた時の自分はどうだったのだろうとか、祖父のことがなかったら自分もあの人達のようになっ

ていたかもしれないと思った。

この夏休みに一週間程ハワイで過ごした。ハワイでは横断歩道以外を渡ると罰則があるので、ほとんどの人が横断歩道でしか渡らない。そのかわり、信号機のない横断歩道では必ず車が停止してくれる。これは車を運転する側と歩行者がお互いの立場を考えるからできる行動なのではないかと思った。

交通ルールを守るのは当然のことだと思う。でもルールだけでは守れないこともある。自分には安全な環境でも、その同じ環境で危険にさらされている人達がいることを忘れてはいけないと感じた。

それぞれがそれぞれの立場に立って思いやりのある行動をとる人達が増えれば、ルールだけではカバーできない安全が確保されるのではないかと思う。

香川県善通寺市立東中学校

三年 小野のりゅうた 龍太

## 僕たちの挑戦

〈ふるさとのいのちを守る〉

僕のふるさと香川県は、人口十万人あたりの交通事故発生件数が、平成十五年から二十三年まで九年連続で全国一位でした。どうすれば交通事故を減らせるのが、大きな課題になっています。

僕は、ボランティア部に所属していますが、二年前、部に入ったとき、先輩が登校中、交通事故に遭ったことを聞きました。一人は、細道からの出会いがしらで車と接触。もう一人は、二台の車に相次いでねられ、ひき逃げされました。部でも、交通事故対策が、大きな課題になっていました。

僕たちは、善通寺市から交通事故を減らす挑戦を始め、することにしました。

まず、市内のどこで事故が起きているか知るため、警察署から年間の人身事故発生現場の所番地をいただき、その四百十六件を、インターネットの地図に打ち込んでいきました。すると、驚いたことに、市内の交通事故は、いくつかの決まった交差点で何度も繰り返されていることがわかりました。

次にその中から、特に交通事故が多かった二十か所を見に行きました。すると、交通事故が多い交差点には、事故を誘発する原因があることがわかりました。交通量が多かったり、近くにコンビニなどの二十四時間営業の店があったり、車からは見えにくい「かくれた交差点」になっていたりしました。現場に通って、さらに調べると、信号が青から赤に変わるまでの時間にも、大きな違いがあることがわかりました。ある場所では、二分くらい青のままでしたが、一分もたらずに赤に変わってしまう横断歩道がありました。これでは、お年よりの方や足の不自由な方は渡りきれないのではないかと思いました。

僕たちは、こうした市内交差点の問題点をまとめた研究冊子「善通寺市事故誘発交差点」危険は見えてい

る」を作りました。そして、それぞれの交差点の「改善策」を提案しました。

百五十一ページに及ぶこの研究冊子は、市や県の警察署の方から、温かく高く評価していただき、実際に「改善策」のように標識の場所やカーブミラーの角度が修正され、道路標示が塗り直されたり新設されたりしました。

また、冊子をもとに作った「善通寺市交通ハザードマップ（交通災害予測地図）」は、市の広報に掲載されて配られました。このことにより、事故多発交差点で立哨が行われるようになったり、近所の方が、注意喚起の看板や旗を手作りしてつけてくれたりしました。ふるさとが、交通安全に向けて動き出したのです。

昨年は、社会福祉協議会の着ぐるみをお借りして、警察署のご協力のもと、交差点で危険行為を撮影し、写真版のマップ」を作りました。今年も、小さな子どもにも、楽しみながら交通ルールや事故多発交差点を知ってもらえるよう「交通ハザードマップすころく」を作りました。また、「交通安全劇」をつくって、お年よりの介護施設で上演しています。



県内の交通事故は、今も、減るぎざしを見せません。けれども僕たちは、交通事故は絶対減らせると信じて、挑戦をつづけていきます。

佳作

内閣府政策統括官賞

東京都文京区立第九中学校

一年

加藤 かとう

奈々絵 ななえ

意識が自転車事故を減らす！

「ごめんなさい！」

小学校四、五年の頃、自転車に乗っていた私は、周りをよく見ず曲がり角を飛び出してしまった。そのせいでお年寄りの方にぶつかりかけた私は、咄嗟にごめんなさいと謝った。今でも、この出来事を鮮明に覚えている。

このことがあってから、私は自転車の事故について関心を持つようになった。そこで自転車の事故について調べてみると、昔に比べて増加しているという。

だから私たち家族は、自転車事故にあわない、起こ

さないための取り組みを考えた。話し合いの結果、「ヘルメット着用」に決まった。しかし、私と姉はそのことに猛反対した。

「ヘルメットなんて、友達も誰も着けていないし、恥ずかしい！ しかも、頭を守るだけで、事故が減るのにはつながらないでしょ。」

そう反論した私たちに母はこう言った。

「周りからの目と自分の命、どっちが大切な？ ヘルメットをつけると、事故を起こさないようにと意識が高まる。だから、事故の防止につながるんだよ。」

この言葉を聞いて、私たちは渋々、協力することにした。

最初のうちはやっぱり恥ずかしかった。だけど、その気持ち事故への意識につながり、前のような危ないこともなくなった。さらに、ヘルメットに好きなシールを貼るという工夫を凝らし、ヘルメットを進んで着用できるようにした。また、暗くなると自動で点灯するライトにしたりと、家族で事故防止のためにいろいろ活動した。

中学生になった今でも、事故防止の活動を続けてい

る。例えば、中学生になって利用が増えた携帯電話。運転中、音楽をきかない、電話をしない、携帯をいじらないなどと心がけている。ヘルメットに対する「恥ずかしい」という気持ちは、未だに消えない。だけど、長く自転車に乗るときには着用するようにしている。しかし、人が多い繁華街に行く機会が増えると、危険な思いをすることも増えてしまった。

ここ数年は減ってきた自転車事故。しかし、約十五年前に比べると、対歩行者事故数は二倍以上の件数だそうだ。その原因としては、「自転車事故に対する危機意識の低さ」が挙げられる。だから国民一人一人が、私たちの家族のように事故について考え、取り組みを行う、そういう姿勢が必要だと思う。また私のように、ヘルメットが恥ずかしいなどと思っている方は少ないだろう。だから、ヘルメット着用を義務づけたりと、国や都道府県も事故防止について協力することが必要だ。このように、一人一人、家族同士、国が事故への危機意識を持って、自転車事故により悲しい、怖い思いをする人を少しでも減らしていきたい。

## 信号機の意味

僕の家の近くの道路に、最近、新しい信号機が設置された。この信号が設置されるまでに、いろいろなことがあった。夜中に、大きな物音がして、朝見てみると、車のライトの破片が散らばっていたり、通学途中の中学生が事故にあったりした。その道路は、ゆるくカーブを曲がったあとに直線になっていて、車が入り道を出しやすい。近隣の住人は通学路にもなるその道の横断のために、信号をつくりたがっていた。しかし、横断場所が、カーブのすぐ近くになるため、なかなか許可が出なかった。

ようやく、信号機が設置されたわけで、僕はおそらく一番乗りでボタンを押した。ところがである。歩行者の信号機が青になっても車がすうっと目の前を通りすぎていった。僕は運転手の顔をちらっと見た。「あっ、

しまった。」という表情もなく、何事もなかったかのような平穏な顔をしていた。つまり、ぼおっとしていたようで、信号の存在にさえ気付いていなかったということらしい。「信号が設置されたばかりだから仕方がないのかな。」と僕は思うことにした。

それからしばらくして、家族でこの信号のことを話しているとき、みんなが同様の経験をしていたことを知って驚いた。父など、

「あの信号は、車が気付かず通りすぎるから青になっても、車が止まったことを確認してから渡れ。」とまで僕を諭した。僕は、このとき、信号の役割を考えた。

車も止まらないけれど、人間もせっかくなかったこの信号を使わない人は多い。スイッチを押せば、あつという間に青になるのに、きよるきよるして車が来ないすきをねらって、危なげに渡っていく人もよく見かける。みんなとても急いでいる。信号を使うが使わないかの時間の違いなんて、ほんの少しだと思うのに。

結局、信号をつければ、安全で安心だと思っていたけれどそうではないということだ。信号機はよくできたシステムで、うまく機能すれば、交通安全に役立つ

けれど、使うのは人間で、人間が安全に気をつかい、交通ルールを守ろうと思わないと、しょせん、道具にすぎない。

車に乗る場合は、安全に意識を集中させて標識や信号を見落としてはならない。歩行者は、信号や横断歩道がある場合は、きちんと使用して、渡る際は、左右確認しなければならぬ。まずはあたり前のことをやって、信号機などを有効に活用することが大事なのではないだろうか。

交通安全は一人一人の心がけありきだと僕は思った。

岡山県立倉敷天城中学校

一年

小西こにし

真由まゆ

## 三つ目の心がけ

「キキーン。」

私は思いっきり自転車のブレーキをかけた。目の前を車がすごいスピードで走り去っていく。朝の通学途中のことだ。

私と友達は車が来ていないことを確認してから道路を横断しようとしていたはずなのに、いつの間にか車が目の前まで来ていた。多分猛スピードで走ってきたのだらう。私はほっとすると同時に腹がたつた。私達は止まれたが、もつと小さい子やお年寄りならどうだろう。止まるのが間に合わなかったり、よろけたりして事故になっていたかもしれない。車の運転手は朝の通勤で急いでいたのかもしれない。しかし、もし私達が事故にあっていたら多少の遅刻どころではなく、命が助かっただろう。冷静に考えて安全運転をすれば結局早く確実に到着すると思う。「急がばまわれ」だ。もちろん、車だけでなく歩行者や自転車を運転する人にも言えることだ。

また、最近こんなニュースをきいた。外国の事故だが、トラックにバイクが突っ込み、トラックは十二メートル下に落下してしまった。幸いトラックの運転手の命は助かったそうだ。しかし、この事故について、事

故をおこしたバイクの運転手はこう言ったそうだ。「トラックの運転手が無事だったので気にしていない。」

私はこの言葉を聞いてものすごく腹がたった。「なんて自分勝手なんだ。」考えてみると人が自分の事しか考えていない時に事故は起きやすいのではないかと私の体験でもそうだと思う。車は横断者がいるかもしれないと考え、横断者は車が来るかもしれないと考え、相手の立場になる心を持って事故が減少すると思う。私は事故を起こさないようにするために心がけるようにしていることが二つある。

一つ目はよそ見をしないことだ。よそ見をしていると人や物にぶつかるだけでなく、川などに落ちたり、道路の異常に気付かずにはずかすに転んだりしてしまうかもしれない。

二つ目は自分がここにいて、ということを示すことだ。

自転車に乗っている時は、暗くなったらライトをつける。反射材もつけている。歩いている時は夜行褌をかけるか、ライトを持つようにしている。こうすることで周囲の人から「あそこに人がいるな。」と認識し

てもらいやすくなり、事故を防ぐことができると思う。しかし、今度から三つ目を心がけるようにしようと思う。それは、

「思いやりのある行動をすること」

だ。みんなが「あの人はこの道を渡るうとしていないかもしれない。」「あの車は急いでいるかもしれない。」と相手のことを考えれば事故も防げるし、気持ちよく過ごすことができると思う。気持ち良く過ごせて、事故が減る。こんな世の中にするために、思いやりの心を持って行動する人が一人でも増えてほしいと思う。

岡山県倉敷市立新田中学校

一年 黒田 遙可  
くろだ はるか

## 自転車を凶器にしないために

ひやりとした。そして次に、怒りがこみ上げた。自転車を運転していたときのことだ。向こうから、同じ

く自転車に乗って走ってきた高校生くらいの男性が、スマートフォン画面の操作しながら、こちらに全く目を向けないで、真正面から走ってきたのだ。私達は正面衝突しそうになったが、間一髪、よけることができた。もしもぶつかっていたら、そう思うとぞっとした。

最近、自転車による事故が増え、ニュースでも注目を浴びている。その中でも、特に問題視されてきているのが、スマートフォンや携帯電話を操作しながらの運転である。

少くく画面を見ているても大丈夫という気持ちがあるが、油断につながる。それは、時に重大な事故を引き起こす。後遺症が残るほどの重症になる場合や、寝たきりになることもある。最悪の場合、死に至ることさえある。なぜなのか。

自転車は、バランスを崩しやすい乗り物である。片手を離れた状態は、本当に危険だ。加えて、車と違って体の周囲に覆いが無いため、相手にぶつかると、運転者が路上に投げ出される。スピードが出ているときはもつと危険が増す。相手が同じ自転車の運転者であ

れ、歩行者であれ、両者どちらもが怪我をすることになる。

自転車がこのような事態を引き起こす場所は、たいてい歩道である。本来歩行者のものである歩道を自転車車が平然と通行していることにも原因がある。車両に分類される自転車は、本来車道の左側を走ることになっている。スピードが違いすぎる車のわきを走ることとは、自転車側も、車の運転者にとっても、恐怖を感じる。だからつい、狭い歩道を走る自転車が多くなるのだろう。しかしそのせいで、自転車同士、もしくは歩行者との衝突が引き起こされる。そもそも、自転車専用道路がないことが一番問題なのだが、土地の問題もあって、専用道路のあるところはあまりないようだ。

そのように狭いところで、スマートフォンなどを片手に、視線が画面に向けられたまま運転すると、周辺が見えず、とっさの判断ができなくなってしまう。

自転車は免許もいらず、どこでも通行できる手軽な乗り物である。しかし、それはあくまで車両である。正しいルールを学び、それを守って安全に乗ることが、歩行者も、運転者も事故から身を守る一番の方法であ

る。そして何よりも、運転中は、スマートフォンを使用しないようにすることが事故を防ぐ最善の策である。私はまだスマートフォンを持っていないが、持つようになってもこのルールは守ろう、と家族と話し合った。画面より周囲を見て、お互い気持ちよく通行しようと思う。

徳島県 私立徳島文理中学校

一年 中村 なかむら すず

## 自分の命は自分で守る

「車に気をつけて。ドライバーの人全員が前を向いて走っていると思われんじよ」

学校へ行く私に、母は毎朝こう言う。

「うん、わかった。気をつけて行ってくるからね」

歩いてたった十分間の距離なのに、と思いながらも、母に言われた通り注意深く車の通りに気をつけてしま

うのは、四年前に母方の大おばが交通事故で亡くなったからだ。

大おばは、後ろから走ってきた車に追突されて亡くなった。いつも利用していた市営バスに乗ろうとバス停に向かつて歩道を歩いている時だった。ただ、歩いていただけ。それなのに、車に追突されるなんて……知らせを聞いた時、大おばと親しかった母は、しばらくぼう然としていた。その後やっと出た言葉が「どうして？」だった。

しばらくして、事故の原因がわかった。車の運転をしていた女性が病気の発作を運転中に起こし、意識を失ってしまったからだということだ。その女性も重傷を負い、今は入院していると聞いた。気の毒だとも少しは思ったが、それよりもやはり、そんな病気があるのならどうして運転していたのだろうという怒りの気持ちがあわき起こった。そして同時に怖くなった。これまで私は、車は必ず道路を真っ直ぐ走るものだと思じていたけれど、そうでない場合もあるのだということがわかったからだ。

事故のあと、車を運転している人を意識して見るこ

とが多くなった。わかったことは、運転以外のことに気をとられている人が多いということ。一番多いのが、携帯電話で話したり、メールをする人。他にも、となりに座る子どもにも注意を向けている人や新聞を読んだり、けしようにしている人もいた。

驚いた。悲しくなった。なんだか大人に裏切られたような気持ちにもなった。今まで、ドライバーの人は、前を見て、歩行者や自転車の人をきちんと見ながら運転していると感じていたけれど、そうではない人もたくさんいたのだ。車を運転する人は、一瞬で命をつぶす可能性があるということをわかってほしい。

その事故があつてから、母は毎朝家族に「車に気をつけて」と言つようになつた。車で通勤する父には「運転に気をつけて。前を見て、事故を起こさないように」と、つけ足す。安全に過ごすためには、車はもちろん、道を歩く私たちも、いつも車に気をつけていなければいけないということをおおぼの事故で学んだ。もし不運なことが重なつたとしても、注意していれば、最悪の事故は防ぐことができる。「まさか」が起こらないようにするために、道路に一步でたら、「自分（相手）

の命を守る」という意識をこれからも心がけたい。

香川県木田郡三木町立三木中学校

一年

黒田 くろだ

千聖 ちさと

## 心に免許証

「車をひかないようにね。」母が、私を見送る時に、必ず付け加える一言だ。失礼な冗談だ。もし私が車とぶつかったら、車がへこむとでも言いたいのだろう。でもどう考えても自転車のほうが弱いし、歩行者には注意しているから余計な心配だと思っていた。

ところが、先日、自転車事故で九五〇〇万円賠償命令というニュースを聞き、私にはすぐに、内容が想像出来なかった。自転車事故ってどういうこと？ 九五〇〇万円を支払うのは自転車の運転手？ しかも、小学生？ 色んな疑問が頭の中を回った。インターネットで調べたところ、ノーヘルメットの小学生が、



時速二十から三十キロのスピードで、女性に衝突、女性には脳挫傷の重症で五年間も意識不明のままだとわかった。裁判で、小学生の前方不注意が事故の原因と認定され、またノーヘルメットは親の交通マナーの指導不足ということで判決に至ったと書かれていた。

この事故を知ってから、私の自転車運転に対しての認識が、いかに甘かったかを思い知らされた。自転車は、道路交通法上は軽車両である事、車道を左側通行する事、飲酒運転も適応される事は、家でも話をしたことがあるから知っていた。だから私は、自転車の交通ルールの知識は結構あるほうだと思っていた。ヘルメット着用は、ちょっと格好悪いけど、中学校を卒業するまでは仕方ないと思って、毎日楽しく自転車に乗っていた。

でも、自転車も、法律を破れば罪に問われ懲役や罰金は当たり前だったのだ。つまり、もし何か起きれば、車の事故と何も変わらない、いつ加害者になっても不思議ではないとやっとな気で気付いた。とても怖くなった。もちろん今までに、無茶な自転車操作をした覚えはないし、歩行者がいたら注意して運転した。で

も、それだけだった。自転車も走る凶器だったとは少しも思っていなかった。

最近では、自転車に特化した保険も増えてきたようで、母に確認したら、私もそのような保険に入っていると教えてくれた。少し安心したが、母に「油断しないでね。」とも言われた。もちろん事故を起こさないのが一番いいに決まっている。昨年の交通事故の約二割が自転車乗車中で、自転車が加害者になったケースは約二万件だそうだ。自転車は弱いという考えは捨てるべきだと思ったら、母の一言の持つ意味の深さがわかってきた。

事故は、一瞬にして全てを壊す。高額賠償も大きな問題だ。母が小学生の頃は、学校独自の自転車免許証があり、試験を受けていたそうだった。級ごとに乘っている範囲の制限や、違反切符の制度もあったと聞き、びっくりした。もし今も同じ規則があったら、私は合格できたのだろうか？自分の心に免許証を渡してみた。ハンドルを持つ手が引きしまり、背筋ものびた気がした。この免許証に恥じない乗り方をしたいと強く思った。

## 朝の道路は通学路

私の住んでいる地域は道路が狭く、家の前の道路は車が一台通れば、道路がほとんど埋め尽くされてしまいうくらいに、通るのは危険です。そのうえ、最近は近くに大型ショッピングセンターができたこともあり、車の交通量はいつそう増えました。

そして、この狭い道路は小学生や中学生の通学路となっていて、毎朝、学校へ登校するために、多くの子供たちがこの狭くて危険な道路を通ります。事故が起きないようにと、保護者の方や地域の方たちが、子供たちの安全を守る活動の一つとして、私たちの登下校を見守る活動をして下さっています。

しかし、安全に通りたいと願う小学生や中学生の私たちがいくら気をつけても、朝の急いでいる車に乗った大人はそうではないことが感じられる時がありま

す。

以前、前を歩いている登校中の小さな小学生がいるにも関わらず、とても速いスピードで、その子に少しも注意をはらわずに走行する車を見ました。それを見て、私は一瞬にして全身が凍りつき、「これならいつ事故が起きてもおかしくない」と思いました。このような体験をしたのはこれだけではありません。私も同じような体験をしたことが何度もあります。同じく登校中の話で、私の中学校の鞆は背中よりも横幅が十五センチメートルほど大きく、その鞆の左端が、これもとても速いスピードで横を通った車に当たったことがありました。わずかに当たっただけだったので、運転手の方は気づかなかったようですが、「もし、私がおう少し左にいたら…」そう思うだけで体が震えます。

やはり、狭い道路でスピードを出すことは、一歩間違うと大惨事に繋がってしまうため、大変危険です。そして、毎朝の会社へ向かう車と登校中の子供たちには、交通事故という言葉はいつも隣り合わせだということです。

### 妹の交通事故で考えたこと

シウマイを見ると思い出す。二年前に起きた妹の交通事故だ。当時、妹は小学四年生、私は六年生だった。

あの日、同じマンションに住む、幼なじみのお母さんに、シウマイの作り方を教わり、一緒に作っていた。少し時間ができたので、私と妹と幼なじみは、すぐ近くの公園に遊びに行った。私達は、二つしかないブランコに乗りたくて走っていた。Ｔ字路に差し掛かったときだった。先頭を走っていた妹は、白線で止まらずに横断し、右から走ってきたワゴン車に激突した。Ｔ字路にある鏡で、走ってくる車を確認した私が、「止まって！」

と、叫んだとほぼ同時に事故は起きた。妹は道路脇にはね飛ばされて倒れた。私は、何が起こったのか状況

そこで、私は安全に登下校ができるようにいくつか気をつけたことがあります。まず、今一度、自分が毎日通る道に潜む危険を考えることです。少し気をつけてみるだけで事故は随分と減ります。「この横断歩道は信号が青でも車が曲がってくるから、確認してから渡ろう」「あの角を曲がる時は必ず左右を確認しよう」という小さな心がけが大きな事故を防ぎます。そして、交通事故を防ぐために自らが活動をしていくことです。地域の活動に参加して、日頃、自分が感じていることについて呼びかけや注意をすることで、みんなの意識は変わり、私たち小中学生は笑顔で登校することができず。

一人が変わればみんなが笑顔、というように安全に運転をすれば、みんなが笑顔で道路を通ることができません。朝の狭くて危険な道路は、安心安全、大人も子供もみんなの通学路です。相手を思う心をみんなが持つことは、私たちが一番簡単に作れる交通安全です。

が分からず、しばし呆然としてしまった。我に返って妹の名前を叫んだ。妹は、道路に倒れたまま足が痛い<sup>ぐ</sup>と泣いていた。ワゴン車を運転していた男の人が、すぐに百十九番通報してくれた。幸い妹は、命に別状はなかったが、さ骨と足の指のつけ根を骨折してしま<sup>ま</sup>った。妹が病院で診察を受けている間、私と弟と未<sup>ま</sup>の妹は、幼なじみの家で待っていた。妹も一緒に食べるはずだったシユウマイを幼なじみのお母さんがテールに用意して、みんなで食べている間も、妹の事が心配で、胸がキューツと苦しかった。今まで目の前で交通事故が起こることもなく、まさか家族が交通事故に遭うなんて、思ってもみなかった。もし先頭を走っていたのが妹ではなく、私や幼なじみだったら、同じ様に事故に遭っていたかもしれない。私は初めて交通事故の怖さを実感した。

いつからだろう？ 交通事故の怖さが薄れてしまったのは……。

幼稚園に通っていた頃は、一人で道路を歩くのが怖くて、いつもお母さんと手をつないでいた。

小学校低学年の頃は、学校行事の交通安全教室で、

手上げ横断や飛び出しの危険性を、何度となく学んできた。その頃は、

「右、左、右、安全です。」

と、大きな声で左右を確認し、真つすぐ手をのぼして横断歩道を渡っていた。しかし、大きくなるにつれ、声を出したり、手を上げて渡るのが恥ずかしいと思うようになり、今では、左右をただで確認するだけになっていった。自分で、危なかったと背すじがヒヤツとすることも何度かあった。実際に事故に遭ってみないと人は注意をしないのかもしれない。しかし、事故に遭ってからでは遅いのだ。だから、日頃からの注意や意識が大事なのだと思う。小さい頃からの交通安全教室は、そういう意識を持たせるために行われていたのだ。

妹が元気に回復した後、家族で交通安全について話し合いをした。何事故が起きてしまったのか。自分が注意していても、起きてしまう事故もあるが、今回の場合は、私達が、ブランコに乗りたいという目の前のことにしか意識が向いていなかったからだ。歩行者も、車を運転する人も、お互いに注意しあうことで、

交通事故が減るに違いない。

シウマイを見ると、交通事故の怖さと共に、妹が無事で良かったと、心から思う。

愛媛県今治市立日吉中学校

二年

穴吹 あなぶき

優里香 ゆりか

## 家族にとっての交通安全

私の父は、毎日片道一時間半かけて、車で通勤している。これまでは、通勤の辞令が下りるたび、家族で新しい土地に引っ越してきた。が、今回はわずか一年での通勤だった事、私が中学生という事も考慮して、父にとってギリギリ通勤可能な距離だという事で、自宅からの車通勤という方法を選んでくれたのだった。引っ越しせずに済んだ事はありがたかったけれど、父から何度となく、通勤途中に事故現場を目撃したという話を聞くうちに、もし父が事故に遭ってしまったら

どうしようと、不安を感じるようになってきた。

私は自転車通学ではないので、普段はもっぱら徒歩、母もペーパードライバーなので、移動は徒歩か自転車である。

私達みんなが事故を起こさないためにはどうすればいいか、考えてみた。徒歩、自転車、車、どの場合でもまず、時間に余裕を持って出発する事が、大切だと思ふ。焦ると周りが見えなくなり、注意力も衰えてしまう。

睡眠不足時の車の運転は、居眠り運転につながりやすいので、避けたほうがいい。

自転車は最近、歩行者をケガさせる事件が多発している。スピードを出しすぎたり、飛び出したり、急に横切ったり、夜なのに無灯火だったり、並列運転やジグザグ運転をしたり。父からも、車を運転していてヒヤッとする事が多いのは、歩行者よりもむしろ、自転車のほうが多いと言われた。

私も高校生になったら、塾にも通うだろうし、今より行動範囲も広がって、自転車に乗る機会も増えると思ふので、気をつけなければいけない。

しかし、どんなにこちらがきちんとルールを守って気をつけていても、事故に巻き込まれる事もある。これはもう、不運としか言いようがない。が、車だったら、なるべく多めに車間距離を取るとか、早めに方向指示器で知らせるなど、ある程度なら防衛策をとれるかもしれない。自転車だったら、危なそうな場所ではすぐに自転車から降りて、押して歩く。徒歩だったら、信号が点滅し始めたら、無理して渡らずに待つ事も必要だと思う。どの場合も大切なのは、「むこう（相手）は、こうするだろう」という勝手な思い込みをしない事だと思う。

助け合い、支え合ってきた大切な家族を、交通事故で一瞬のうちに失ってしまふ。こんなつらい事はない。見渡すと私の周りにも、事故に遭った人が思ったより多くて、シヨックだった。いつ、誰が事故に遭ってもおかしくない状況にあるのだと、思い知らされた。

私達は、愛する家族のためにも、最大限の努力をして、交通事故に遭わないよう気をつけなければならぬ。私と母は、今日も安全と無事を祈りながら、父を送り出す。そして、夜、父の元気な「ただいま。」の

声を聞いて、ホッとする毎日を送っている。

大分県別府市立中部中学校

二年 澤井 裕二  
さわい ゆうじ

### 交通事故に巻き込まれないために

僕は、夏休みの間、毎朝父親をバス停まで見送っています。バス停までは登り坂で、途中交差点が八か所ほどあります。その日も父親と一緒に、バス停に向かって歩いていました。最後の四つ角にさしかかったときのことでした。右の方から自動車がかかるのがわかりました。直接目で確認したわけではありませんでしたが、エンジンの音が聞こえたので、交差点の手前で父親と一緒に自動車が通過するのを待っていました。そのときです。高校生の運転する一台の自転車が、僕たちの反対方向から坂を下ってきました。そして、交差点の手前で一時停止することなく進行し、僕たちの横を通

り過ぎて行きました。その高校生は交差点で左右を確認することなく、自分の進行方向だけを見ていました。僕はそのときに、高校生の耳からイヤホンがぶら下がっていたことに気づきました。たぶん音楽が何かを聞いていたのだと思います。自転車と自動車の交差点に入るタイミングが違っていたことやあまりスピードを出していなかったことから、ぶつかりそうな状況ではなかったのですが、少しでもタイミングがずれていたり、自動車がもう少しスピードを出していたら、交差点の中で衝突事故が起きていたかも知れないと思いました。

最近、自転車事故のニュースをよく耳にします。スピードの出し過ぎや携帯電話をしながらの運転など、重大なケースとしては、歩行者をはねて死亡させた事故も発生しているようです。「ながら運転」はとても危険だと思えます。確かに、ひとつのことをしているときに別のことに手を出すと、集中できなくなります。自転車を運転するときはなおさら注意が必要です。携帯電話をしながら運転していると注意力が散漫になり、まわりに目が行き届かなくなるのは当然で、状況

判断もおろそかになると思います。音楽を聞きながら運転をしていた先ほどの高校生のケースでは、まわりの音が聞こえず、耳からの情報が全く入ってこないとても危険な状態でした。これでは、いつ交通事故に巻き込まれてもおかしくありません。僕は自身は自転車を運転することはありませんが、歩行者として、自動車だけではなく、自転車にも気をつけなくてはと最近感じています。自転車は、自動車のように音を立てて近づいてくることは少なく、振り返ったときにすぐそばに自転車がせまっていたことも少なくありません。

交通事故を防ぐためにはどうすればよいか。一人ひとりがきちんと交通ルールを守ることは当然ですが、安全確認の徹底もとても大切なことだと思います。みんなが常に相手の立場に立って行動すれば、交通事故のない明るい社会を築くことができると思います。一日も早くそんな日がくればよいと願っています。

## 見直したい「今」

私の住む地域は学校や駅、ショッピング街が近くにあることから、朝の通勤通学の人が多く、それに伴う自転車の往来や自動車の渋滞がよくあります。朝は時間に追われているということもあり、その時の交通マナーが少し気になります。

そのような中で、最近私が目にしたことがあります。私が家族で車に乗っているとき、ベビーカーを押している若いお母さんを見かけました。そのお母さんの片手にはスマホ、もう片方でベビーカーを押していました。私の母が止まらなかつたら、きつと車に気付かず、大きな事故となっていたかもしれないと思っていました。すると、母が、

「命の大切さを知っていれば、両手でしっかりベビーカーを押す大切さもわかるし、親子の信頼関係があれ

ば、そんなことはしないはずなのに。」

とつぶやきました。そのとき、ちよつとした気の緩みで事故につながったり、ちよつとした心がけて安全な生活が送れるのだなと感じました。

このことも含め、最近多くなっている「ながらスマホ」。これは、横断歩道を渡りながら、スマホを使うことや自転車をこぎながら、スマホを使うことなどを指します。この「ながらスマホ」は、危険な目にあつた人や交通事故にあつた人が多いことから問題視されています。通信手段がどんどん便利になる反面、スマホ依存からの交通事故が多くなりつつあります。このような交通事故は「ながらスマホ」をしている人だけでなく、普通に生活している人を事故に巻き込むときもあると思います。

「自分には起こらないから大丈夫。」

という思い込みは多くの人にあると思います。私も母のつぶやきまでは、他人事のように考えていました。そこで私は、自分の交通マナーを見直そうと思い、過去の自分を振り返ってみると、今までにヒヤツとした経験がいくつありました。そして改めて、交通事故



の怖さを実感しました。過去の自分を改め、交通ルール・マナーを考え直す機会にもなり、これは、誰にでもできると思います。

「交通ルール・マナーに対して、今まで以上に自分に厳しく、正しい知識を持つ」これは私にとって、これから今まで通り、安全な生活を送るといふ継続でもあり、課題でもあります。

近い将来、進化していくのはネット社会だけでなく、人間のモラルや思いやりでありたいです。「ながらスマホ」だけでなく、交通事故自体がゼロになると信じて。

宮城県仙台市立長町中学校

三年

後藤

亮

## 交通事故の教訓

私は交通事故を起こしたことがある。

それは小学校六年生のときだった。友達と学校で遊ぶために、自転車に乗って急いで学校に向かった。そんなときだった。前方から三年生の女の子三人が鬼ごっこをしながら向かってきた。前の二人が自転車に気付いて方向転換した。しかし最後の女の子が気付かずぶつかってしまった。

「痛い、痛いよ。助けてください。」

そんな言葉を前に私は無力だった。雲が太陽の光をさえぎった。光が目の前から消えた。絶望という名の雲によって。

病院に行き、待機所で待っているとき、その子の母親が来た。そしてその子のランドセルを大事そうに抱えていた。ランドセルに付いているキーホルダーも一

一つ手に取り、不安な表情で見ている。このとき私は本当に取り返しのつかないことをしたと実感した。胸がしめつけられるような言葉にできない感情。今すぐこの場から逃げたかった。

数日後、母と私は改めて謝りにいった。

「今回、傷つけてしまって、ごめんなさい。」心から謝った。その後、私だけ家に帰り、母はその子の両親と話し合った。迷惑かけてごめんなさいと母に言いたかった。しかし、できなかった。その気持ちを察してくれたのかうなずいただけだった。

数ヶ月後、その子が学校の昼の放送に出ていた。その姿を見たとき、涙が出てきた。自分でもわからなかった。そして昼休みに先生に相談した。何を相談したかは忘れてしまったけど、先生がこんなことを言ってくれた。

「涙が出るのはその子に対して申し訳ないと思ってるからなんだよ。」

この言葉で、絶望的な日々から立ち直ることができた。心の雪が溶け始めてきた。今まで時間があいているとき、なぜかぶつかるシーンだけ思い出してしまっ

た。しかし、今では思い出さなくなった。

この事件から、自転車事故は大変なことだと分かった。被害者も加害者も本当に辛く、悲しい気持ちになっってしまう。しかし、いつまでも悲しんでいるのではなく、これを教訓として今後の生活に活かしていきたい。

私は、このようなことを二度と起こしたくない。いや、起こさない。そのために二つのことに注意してほしい。

一つ目、前方の人の動きを予想しながら乗る。そうすることで、お互いに譲りあえて、上手くいく。

二つ目、絶対左通行。この事故を起こしたとき、私は真ん中を走っていたからだ。しかも左側にいると、車にも早く気付かれるという利点もある。

私は、日々願っている。このような事故がこの世からなくなるように。そして全ての事故がなくなるように。

## 命を守るもの

シートベルトをしていたら……シートベルトをしていたら、もしかしたら父は死なずにすんだかもしれない。

今年の五月、父は高速道路で交通事故に遭い亡くなってしまった。その日の六時過ぎ、僕が学校へ行く用意をしていたときに、電話が鳴った。「現場に向かう途中、車が事故にあつて、お父さんが車の下敷きになつて……意識不明の状態なんだって……」電話を受けた母は何が何だか分からない状態だった。なぜなら、父は母が作った弁当を持って一時間ぐらい前に出かけたばかりだったから。

父は七十四歳だった。高齢だったが、僕たち家族の生活のために、友だちの仕事を手伝っていた。その日も、県外に仕事があるといつて、友だちが運転する車を出かけた。

その車で事故にあつたのだ。後で分かつたことだが、後部座席に乗っていた父は、シートベルトを着けていなかった。事故の衝撃で車外に放り出され、後からきた車にひかれてしまったらしい。車の下敷きになつた父は意識不明の状態で病院に運ばれた。父が運ばれた病院に駆けつけたが、意識はもどらないまま父は亡くなつてしまった。

父は小さな骨つぼに入つて戻ってきた。

すぐ上の姉は、泣き通しだったが、僕は泣けなかつた。「お父さんに代わつてあなたががんばるんだよ。」といろいろな人に言われた。家族の中で男は僕だけだつたから。でも僕は何をどうがんばればいいのかわからなかつた。それからの僕は、夜遅くまで起きていて、朝起きられずに、学校に遅刻をするようになった。朝寝坊したり、ぐずぐずしたりしているとよく父に叱られた僕だった。でも、叱つてくれる父はもういない。ただ母を困らせるだけだと分かつていてもなかなか乗りこえることができなかった。父という大黒柱を失つた僕の家は、崩れてしまった。

三年生になつた今、自分の進む道を考え学校を休ま

ずに登校できるようになった。父の死は忘れることはできないが、父の死を乗り越えることができたと思う。姉に赤ちゃんができて、僕は中学生でおじさんになった。父が生きていたらきつと喜んでに違いない。それに、車に乗るとき、シートベルトをしていたらと後悔しているだろう。

運転者でもシートベルトをしていない人を時どき見かける。シートベルトをしなくても事故を起こさないから大丈夫、と考えているのかもしれない。でも、交通事故は起こしたくて起こす人はいないし、交通事故にあいたい人はいないはずだ。車に乗ったらまずシートベルトだ。これは亡くなった父が残した言葉になった。運転するしないにかかわらず、車に乗ったらシートベルトを着けよう、それが自分の命を守るんだと大きな声で訴えたい。

埼玉県川口市立上青木中学校

三年

犬塚 いぬづか

舜也 しゅんや

悲しい、二月二十二日

二月二十二日、一瞬、誰も笑わず静かに目を閉じる時間が、僕の親戚・家族にはあります。でも、その後、必ず祖母が、

「えみちゃん、今年もみんな来てくれてうれしいね。一緒に家に帰ろうね。」

と、お墓にむかつて話しかけます。

僕の母親の一番上の姉が、交通事故で亡くなった命日なのです。目をつぶっている祖父・祖母の姿は、とても寂しそうでなかなか話しかけることはできません。きつと、お墓で眠っているえみちゃんと、心で話しているんだなど、僕は毎年思っています。生きていれば、もう、50才になっていると母が言っていました。母が生まれる前、2才の時に、車に頭をひかれて亡くなったそうです。そういえばいつも祖母は、頭が

痛くなると、

「えみちゃんが、痛くてつらかったのを思うと、おばあちゃんは我慢できる。」

と、言っていました。

僕が小さい頃から聞いていた言葉ですが、大きくなるにつれ、その言葉がどれほど辛く、悲しいものなのか、少しずつ理解できるようになってきました。

交通事故は、なかなか減ることができず、今の車社会の時代には、むしろ増えているのではないかと思えます。確かに、便利な物だし、運転免許を持つていない人の方が少ない位ではないかと思えます。ちゃんと自動車学校に通い、勉強をし、試験を受けて免許を取得しているはずなのに、乱暴な運転をしたり、交通違反をしたりする人が多くいます。ルールを守り、ちゃんと運転をすれば、便利な物だし、人助けも沢山できる乗り物だと僕は思います。でも、乱暴に使えば、人を死においやつてしまふ、恐ろしい乗り物になつてしまふのです。そして、大事な家族を亡くしてしまつた家族は一生、悲しみを背おつて生きていかなければならないのです。まだ、小さい時は、人間の死に対して

深く考えた事はなかったのですが、もし今、目の前にいる家族や親戚・友達がいなくなつてしまつたら、と考えると頭の中が、真っ白になつて何も考えられなくなつてしまいます。今でも、祖父・祖母と道を歩いている時、隣をジープが走ると目をそらす二人の姿があります。僕にはきつと理解できない程の悲しみが、ジープを見るたびにあふれているのだと思えます。

僕も、いずれは車の免許を取ろうと思っています。でも、それは便利な物として使おうと思つているからです。祖父や祖母を病院に連れて行つてあげたいからです。

これからもずっと、二月二十二日は悲しい日のままですが、お墓や仏壇に手をあわせて、母のお姉さんの事を忘れずに過ごしていこうと思えます。

## 慌ただしい生活の中で

私が交通安全について考え始めたのは、祖父の入院がきっかけでした。

3年前に、今までずっと元気だった祖父が難病のパーキンソン病を患って入院しました。3カ月程して退院して来た祖父は、シルバーカーを押して帰ってきました。パーキンソンの病状に加えて膝も悪くしていた祖父は、歩くことさえままならず上半身が大きく前へ曲がり、日常の生活がかなり不便になっていました。退院してからというものの、私は買えるものなど祖父の外出を時々手伝うようになりました。私たちのような健康者にとつては楽しい事ではないの外出も、祖父にとつてはそんなに簡単なものではありませんでした。シルバーカーを押しての買えるものは少しの段差も障害物になるし、進み方もゆっくりだし、車がきても素早

く対応する事なんてできません。急ぐとバランスを崩して転倒しそうになってしまいます。私が一緒の時は車の運転手さんに頭を下げて待ってもらえますが、祖父一人の時は、ふり返って頭を下げる余裕もありません。運転手さんによってはクラクションを鳴らしたり、怒って「早くしろ」と怒鳴って来た人もいると祖父は言っていました。車ばかりではありません。歩道を走っている自転車のスピードも、何気なく鳴らしてくるベルの音も、祖父と一緒に道を歩いていると緊張の連続です。

祖父との外出を通して私自身も反省することがたくさんありました。お年寄りばかりではありません。身体の不自由な方や小さな子供、ベビーカーを押している人や車椅子の方など、全ての人にとつて安全で優しい社会になってほしい。今、心からそう思っています。その為に今、私がしている事は、外出するときはいつも周りに気を配りながら歩くようにしています。自転車に乗って出掛ける時は、スピードを出さずいつでも止まれるよう安全運転を心がけています。

慌ただしくて忙しい毎日ですが、一歩家の外に出た

らそこは皆の社会。全ての人が安全に安心して外出できるよう、一人一人の小さなマナーや気遣いで、優しさあふれる社会になったらいいな、と思います。

そして将来、私たちが大人になったら、次の世代の子供たちにもしっかりと伝えていきたいと思っています。マナーある大人の姿を見て、自然と子供たちが真似できるようなったら、社会全体が変わってくるのではないかと思います。

新潟県 上越教育大学附属中学校

三年

いがらし  
五十嵐

ともゆき  
智之

## 守ろう、雪国の子ども！

私は、豪雪地帯である、新潟県上越市に住んでいます。私の学校の規則で、たくさんの雪が降り積もるの冬は自転車通学を禁止にする、というものがあります。豪雪地帯の特徴的な規則だと思います。

そして私は、毎年冬に悩むことがあります。それは中学生である私たちや、高校生が歩道ではなく、車道を歩いてしまっているということです。自転車通学ができないために歩く生徒が多くなります。それも狭い車道で。そこは狭い道でありながら、一方通行ではありません。しかもその隣には、しっかりと歩行者用の道が整備されています。

歩道ではなく、狭い車道を歩いてしまうのにはある理由があるのです。冬にその歩道がきれいに除雪されないということ。深雪に足が埋まってしまわないくらいには一応除雪はしてありますが、それでもここぼこして滑りやすく大変道が悪く、歩くには骨が折れます。普通、車道を優先に除雪が進むので、歩道の丁寧な除雪までは間に合わないのは分かります。

しかし、そのことである問題が生じてしまっているのです。必然的に狭い車道を歩かざるを得なくなってしまうた子ども達の横を、二台の車がすれ違えます。二台の車と子ども達が同じ道にいて、ただでさえ狭い車道がさらに塞がれてしまいます。こんなに狭い道で車がスリップして子ども達の集団に衝突してしまっ

ら、子どもが滑って車に引かれてしまったら、想像するだけでも恐ろしいです。このままでは、いつ事故が起ころうともおかしくないのではないかと思います。

私は、歩行者にも、車にも非は無いと思います。歩きたいわけではないのに車道を歩かざるを得ない歩行者、本来のルールに従って車道を走る車。そこで私は、除雪に問題があると考えました。もちろん市の予算の問題もあるので、私たち子どもだけの意見で決められるわけはありません。でも、もつと何か工夫が出来るのではないかと思います。残念ながら、今はその工夫を思いつくことは出来ませんでした。

除雪に莫大な費用がかかるのは理解できますが、先ほどから言っているように、その道を歩いているのは登下校中の子ども達ばかりであり、大人は皆車に乗っています。私たち中学生は我慢して歩こうと思えば歩けますが、小さな体でたくさん荷物を抱えながらあの歩道を歩いている小学生はもつと危険です。

事故が起こっていないからいい、そういう問題ではないと思います。未来の希望の種である子ども達の安全を脅かすようなものは、無くしていかないとけない

いでしょう。

雪国の子どもが冬期間も安心して通学できるようにするために、私たちが、「真の安全とは何か」ということを、今一度確認していかなければならないと思います。

香川県高松市立玉藻中学校

三年

大西 おおにし

海月 みつき

## 交通事故を目の当たりにして

私の弟は二年程前、ひき逃げにあつて重傷を負いました。第一発見者は私でした。何かドロツとした血を大量に吐いていて、頭や顔や腕や脚からも血がダラダラ垂れていて、聞いた事も無いような声で「ヴオーヴオー」と唸っていました。まず、救急車と母と向かおうとしていたスポーツ少年団の方に連絡しました。その後、何をすればいいのか分からず、ひたすら弟の



体を拭いていました。拭いている最中に弟がああ聞いた事も無い声で「ごげだ（転んだ）だけ。だいじょうぶ。」と言って動こうとしたので「黙れ!!! 動くな!!!」と怒鳴ったのですが、意識がもうろうとしているため、なかなか黙ってくれませんでした。救急隊が来てタンカに乗せようとしても、怪物みたいに大暴れして「ごげだだけ!!! のげ!!! ごげだだけ」と言っていました。タンカに乗せて、気管に管を通すだけでも時間が掛かってしまつて、結局そこを出発したのは、救急車が来てから一時間後でした。それからICUに入っていました。母はショックで倒れて、私は警察や報道機関の質問攻めにあつていました。ニュースを観て病院に来てくれた友達もいました。

三日後に弟は意識を取り戻しましたが、色々な障害が残つてしまいました。血の量が足りなくて真っ白になつていたし、顔が腫れて鼻が見えませんでした。そして、私は弟が入院している間、ずっと友達の家で生活していました。だから卒業式も入学式も一人で行きました。警察も犯人探しを必死でしてくれました。犯人が捕まつてからは、裁判の準備で大変でした。色々

と大変で疲れていたけど、私が疲れていた主な原因は、夜に、弟を発見した時の事が頭に浮かんで、なかなか寝れなかった事と誰かが死ぬ夢を見る事でした。私も辛かったけど、弟はもつと辛かったと思います。前歯二本以外歯が抜けて、上手く話せないし、ベチヨベチヨの物しか食べられない。脚が動かなくて車椅子生活で楽しくない。私にはこんな生活、たえられないと思ひました。

これからも弟は脚、歯、心臓を入れ替える手術をしなければなりません。事故というものは、一生被害者を苦しめていきます。加害者の人も、事故を起こした事で人生を狂わせてしまいます。弟をひいた人はまだ若くて、これからたくさん楽しい事が待っていたはずですが、事故を起こしてしまったので、一生この事を背負つて生きていかなければなりません。記憶は消えうとしても簡単には消えないし、例え消せたとしても過去に起きてしまったことは、もう消すことは出来ません。

これらの様に、事故にあつても良いことなんてありません。自分が加害者になるという事は、被害者だけ

でなく、たくさんの人に迷惑をかけてしまうという事を、きちんと頭に入れて、道路を使ってほしいと思います。さらに、自分にも大きな被害を及ぼす事を忘れないようにしてほしいです。一人一人が本当に気を付けて、きちんと周りを見て行動出来たら、交通事故は起こらなくなると思います。



一般(高校生以上)の部

## 最優秀作

内閣総理大臣賞

京都府京都市

池松 いけまつ  
俊哉 としや (会社員)

### 祖父からの贈り物

私の祖父は86歳。一昨年ドライバーを引退した。

幼い頃、車でよく魚市場に連れて行ってってくれた祖父も、年齢が80を超えると体力や注意力が衰えてきた。ある日、久しぶりに祖父の運転する車の助手席に乗った。交差点に差し掛かったとき、赤信号にもかかわらず車のスピードは変わらなかった。私は思わず、信号！信号！「ストップ！」と叫んだ。祖父は慌てて急ブレーキをかけ、車は停止線を越えたところで止まった。幸い車は来ていなかったが、大きな事故につながりかねない危険な体験だった。

また、こんなこともあった。祖父が自転車を追い越

そうとセンターラインをはみ出したとき、クラクシヨンが鳴り、またも急ブレーキ。対向車とあわや正面衝突というところだった。もはや家族からは、走る凶器」と言われる始末。私たちは祖父にドライバーの引退を提案することにした。

「じいちゃん、車の運転控えたら」と言うつと、頑固な祖父は「大丈夫や！心配せんでええ！」の一点張り。私たちは祖父を想う一心で繰り返しお願いした。「じいちゃんが好きだから、心配だから言ってるんだよ。関係ない人を事故に巻き込んだらじいちゃんもその人も不幸になってしまう。自分だけじゃなくみんなのために車を卒業しよう。」1週間後、さすがの祖父も根負けして免許証を差し出してきた。

しばらく祖父は悔しそうにしていたが、そのうち歩いて外出するようになった。目的地は、近所の100円ショップだ。安くていろいろんなものが並んでおり、祖父にとってはたまらないようだった。気が付けば祖父の部屋にはお気に入りの100円グッズがずらり。この趣味により、祖父は歩いて外出することが苦でなくなり、以前より足腰が強くなったように思える。血圧も下が

大切な宝物となっている。

るなど、祖父は車と引き換えに、多くの見返りを得ることができたのだ。また、ご近所さんと会話する機会も増え、日々楽しそうに過ごしている。今では、野菜をいただいできては、そのお礼にと釣った魚を自ら捌いてお裾分けしに行く。祖父はここでもまた思わぬ副産物を得ることができたようだ。

先日、我が家の玄関がキラキラと輝いていた。なんと、祖父が100円ショップで買った反射材を、家族の靴や傘、自転車に貼っていたのだ。はじめは驚いたが、誰も反対したり剥がしたりしなかった。祖父を想ってドライバーの引退を勧めた私たちには、祖父の行動が私たちの安全を心配したことだと感じられたからだ。みんな祖父にお礼を言った。すると、「自分が気をつけとつても、事故はいつ巻き込まれるかわからん。後になってからじゃ遅いからな」と返ってきた。

私は今年から社会人になって実家を出たが、外出中にふと靴の反射材を見ると祖父の顔が浮かぶ。この反射材は私の身を守ってくれているだけでなく、家族の絆をも結んでくれているのだと思う。祖父の想いがいっぱい詰まった輝くお守りが、今では私たち家族の

優秀作

内閣府特命担当大臣賞

北海道札幌市

布目 欣生（公務員）

## ファンになってわかったこと

毎朝、車のハンドルを握っていると、小学生の子どもたちの登校の列に出会う。残念なことに彼らは時々危ないことをする。急に走り出したり、車道に飛び出してきたり。

「まったく・・・」  
急ぐときに限って、そういうことがあるから、いらしなから減速する。あんまりひどいときはクラクションを鳴らす。

これがさらに冬道になると、悲惨だ。歩道には除雪された雪が高々と積みあげられ、子どもたちは当たり前

前のように車道に出てくる。できれば他の道を通りたいくらいだが、そうもいかないのだ。いやな気持ちになりながら、運転するのが、日課だった。

ところがこの春、実家からとあるメールが届いた。  
「今日から出勤です」

それはまもなく70歳になる父からだった。定年して数年が経ち、犬の散歩と読書しかなかった父が、この春から急に始めたもの。それが子ども見守り隊だった。早速見に行くと、警察官のような立派な制服を着て、交差点に立っている父がいた。

「朝の散歩にちょうどいいぞ」  
という気持ちで始めた父だったが、次に会ったときには言うことが変わっていた。

「子どもたちが、横断歩道を渡ろうとしているのに、突っ込んできたり、いらしなから待っていたりする車があるんだ。だいたいドライバーに余裕がないんだよな」

僕はそれを聞いて、苦笑いを浮かべた。まさに自分のことだった。

見守り隊を続けていくうちに、父は子どもたちのファン

になったようだった。

「小さい子が、こんなたくさん荷物をもって歩いてるんだ。なのにおはようございますって大きな声で言ってくれるんだよ」

父はそう言いながら、まだ小さい孫の頭をなでる。抱いている孫と、見守り隊で見守っている子どもたちのランドセル姿を重ねて、その日を楽しみにしているようだ。

僕は見守り隊の話聞いてから、例の通勤路を通るとき、ちょっと待てよ、と考えることにした。子どもたちがいつ飛び出してくるかわからないなら、すぐ止まれるようなスピードで走るべきだと、本当に今さらながら思ったのだ。父の声が耳に残っている。

「だいたい心に余裕がないんだよな」

5分でも早く出勤し、朝会の前にひと仕事したい。そんなことはこちらの都合であって、子どもたちには関係がない。子どものせいにするのは簡単だが、まずは大人が交通安全に努める姿を示す方が本当であると思っただ。

父は今日も通学路に立っている。僕は子どもたちの

横を通りながら、子どもたちの横断を待つ。頭を下げている子どもたちを見て、僕はかえってこちらが教えられた気持ちになる。少し早く家を出て、心に余裕をもってハンドルを握ると、景色も変わって見えるのだ。親子二代で子どものファンになりそうだ。

## 佳作

内閣府政策統括官賞

秋田県横手市

後藤 ごとう のはら (高校生)

### それでも運転したいわけ

吹雪の日、祖父から電話を受けた。

「じいちゃんなあ、今、パトカーに乗せられてら。交通事故を起こしちゃまって。パパと代わってけれ……」  
おまわりさんからケータイを借りて話しているらしく、ようやく聞き取れる、惨めそうな声だった。

父は急いで現場に向かう。母は保険屋さんに電話する。祖母は泣きそうになっておるおる歩きながら待っていた。赤信号で停車していた前の車にぶつかったそう。雪が踏み固められて氷のようになっているため、止まれなかった。幸い、相手の車に乗っていた女性に

ケガはなく、とても優しい人で「修理してもらえれば充分ですから」と言ってもらえたそうだ。

心配していた免停にならずに済んだけれど、家族全員から、これからは気をつけて運転するように言われていた。なにしろ家業を父に譲ってから暇つぶしに外出することが増え、それはいいとして、村の人たちから、のろのろと道路の真ん中を走るから危ないと言われていたのだ。

「年寄り扱いしねでくれ。そつたに鈍くはなつてねえ」  
注意されるたびに意地を張って、逆に外出が増えていたのだ。そんな祖父、事故以来びたつと運転をやめた。「一緒に、蕎麦、食いに行かねが？」と誘われることもなくなった。どうしても行きたい時は父に運転を頼んで、家族みんなまで外出するようになった。それだけ起こした事故がショックだったのだと思う。

温泉経営をしていた祖父はお客さんの送迎をしていた。大型バスまで乗りこなしていて、とても運転が上手だった。だけど、七十歳を過ぎた頃から疲れるようになり、お客さんの送迎後は血圧も上がり、めまいがすると言い出した。事故を起こしてからでは遅いと、



家族で話し合つてバスを売ることにした。

送迎をやめれば売り上げが半分以下になる。田舎なので、運転免許を持たない人が多い。いくら家族同士でも、何回も乗せて行つてとは頼みにくいらしい。免許があつても、他の家族が車を使つていたり運転が面倒だつたりして、送迎を頼りにしていた人も多かつた。

そんなお客さんの事情を知る祖父だけにバスを売ることは最後まで反対していたけれど、父は強引に売つてしまつたのだつた。想像通り、客足は激減した。それでも先手を打つておいてよかつたと思う。お客さんの命を奪うことになつては、売り上げどころじゃないから。

この事故で祖父のバスへの未練も、運転への未練もなくなつたと思われた。今まで無事故で来れたことに感謝して、何かできないか話し合つた。そして、警察署が企画した「運転免許返上者サービスマン」に参加することになった。タクシーや知人の車で来てくれるお客さんには入浴代を割引することにしたのだ。たつた百円のことだけれど、勇氣と忍耐で移動手段を手放した人への「褒美」だ。これで交通事故が減るかど

うかはわからないけれど、心構えを奮起させるのには役立つのではと思つている。

祖父と同じ年代の皆さん、運転が危なくなつたと言われていませんか？ それでも運転したいですか？ たぶん、声をかければ乗せてくれる人がいると思ひますよ。大事な命を、意地で出かけて失わないように……。

東京都日野市

大西 賢（会社員）  
おおにし けん

## 手信号

結婚を機に、引つ越しをした。それまで車で通勤していた妻は、自転車での通勤になった。家から妻の職場までの道路は、歩道が狭く、自転車では走りづらい。本来、自転車は車道を走るものだが、ずっと歩道を走ってきた妻には、車道の走行は怖いようだった。

二十代前半の頃、私は自転車競技の選手だった。私には、車道走行の経験がある。その経験から、私は妻にこうアドバイスした。

「手信号をするといいよ。安全性は驚くほど飛躍するから」

これは事実である。自転車の事故が後を絶たないのは、ウインカーがないのが大きな要因なのだ。トラック運転手の友人が、

「車の動きは予測できるけど、自転車の動きはなかなか予測できない」

と漏らしたことがある。なんの合図もなしにモーションを起こすから事故が起きるのであって、自転車に乗っている自分が、これからどういふ動きをするか周囲に見せれば、驚くほど事故は減るのだ。

右直事故うちまじこというのがある。直進する自分と、対向車線から来て右折する相手が衝突する事故だ。選手時代、この右直事故で大けがを負ったチームメイトがいた。時速四十キロで走る選手を、右折する自動車がぶつけてしまったのだ。肩に大けがを負った彼は、結局、そのまま引退してしまった。

だが、手信号をすれば、このような事故はかなり防げる。右折しようとする相手に対して、「ちょっと待ってて」と手で合図すれば、かなりのドライバーが待ってくれる。車道の左端を直進している時もそうだ。前方に停まっている路上駐車路上駐車の車を避けるため、中央寄りに膨らむ場合、右手をピンと伸ばして、「中央寄りに膨らみます」と合図すれば、ほとんどのドライバーはクラクションを鳴らしもせず待っていてくれる。手信号で自分の動きを知らせれば、自転車事故は減らせるのだ。

「自転車は車道を走行する」というルールは定着しつつあるが、それにマナーが追いついていない。ブレーキがない「ピスト」という自転車が流行したのがそのいい例だ。自転車とはいつても重大事故を起こす可能性がある以上、もっと安全走行を励行するべきなのだ。「手で車に合図するなんて恥ずかしいね」

妻はそんなことを言っていたが、私には「恥ずかしいこと」とは思えない。私が選手だった二十年前、ヘルメットをかぶって自転車に乗る人は滅多にいなかった。それが今では、かなり多くの人ヘルメットをか

ぶって自転車に乗っている。安全性が担保されれば、大半のことは普及するものなのだ。

車道走る時は、自転車の自分がどういふ動きをするか、はつきりとアピールする。それは安全にとても有効な方法である。

自転車ブームでスポーツ用の自転車が飛ぶように売れているというが、これからは安全のための手信号も流行ることを願っている。

東京都北区

米田 よねだ 友祐 ゆうすけ (アルバイト)

### 店員の質問から考えたこと

ある日、家族とレストランへ夕食に出かけた。久しぶりの休みに、私は日ごろ我慢していたアルコールを注文した。すると、店員から「自動車か自転車は運転しませんか」と尋ねられた。その日、徒歩で来ていた

私は「はい、乗りません」と答えたのだが、店の人からそう聞かれたのは初めての経験だった。

飲酒運転が社会問題となって久しい。警察も厳罰化や啓発活動で飲酒運転撲滅に挑んでいるが、罪のない尊い命が失われたという悲惨な事故のニュースがときおり、私たちの胸を締めつける。とくに、幼い命が奪われたというニュースは痛ましく、被害者の無念を思うとやるせない気持ちになる。

仲間内で飲むのは、もちろん楽しい。ついついアルコールに手が伸びてしまい、「自分だけは大丈夫だろう」そんな気楽な考えが、後に取り返しのつかないことになる。加害者がどんなに悔いようが、一生かかって金銭的に償おうが、失われた命は二度と帰ってはこない。加害者はまさか望んで人の命を奪ったわけではないだろうが、現実として、飲酒運転による死亡事故は立派な殺人といつてよいのではないか。

責任は、飲酒運転をした本人だけでおさまらない。運転すると知りつつも飲酒を許容したその場の仲間、はては利益優先でアルコールを提供した店側も、多かれ少なかれ、殺人に加担したということになるだろう。

先のレストランの事例は、当然ながら飲酒運転を防止するという目的があるのだらう。全国チェーンの店だったから、会社の方針として全店舗で、アルコールを注文した客にたいして確認しているものと推察される。

飲酒運転の防止にがんばって、客自身の意識の高さも重要なことは言うまでもない。よく目にする言葉だが、「飲んだら乗るな。乗るなら飲むな」これに尽きる。車に乗る場合はハンドルキーパーを決めておく。友人たちとたまには羽目をはずすのも大いに結構だが、節度のある楽しみかたをしたい。

いま一度、レストランの店員の質問をみると、そこには「自転車」という言葉もはいつていることに気づく。自転車も、道路交通法で軽車両と定義される、立派な車両なのである。事故をおこせば、深刻な被害につながる恐れがある。自分も含めて、自転車に乗るとき人はそのことを忘れがちだが、自転車も車両の一種であることを意識して、安全運転に努めるべきだろう。もちろん、酒気を帯びての運転などもってのほかである。

事故にならないまでも、自転車でスピードをだして歩道を駆け抜ければ歩行者は恐怖心をもつし、車道を逆走すれば危険きわまりない。建物を出れば、そこは様々な人と車とが行き交う道である。法律を遵守するのは当然のこととして、そのうえで安全のために、相手の身になって考える想像力を、日ごろから、とくに道の上では常にもちたいものである。

神奈川県横浜市

岡部 おかべ

晋一 しんいち (無職)

### 高齢者よ交通弱者の汚名を返上しよう

最近、高齢者が交通事故の被害者になる事故が激増しているが、その原因の一つは、高齢者の自分自身の運動能力や反射神経に対する過信が大きい。

例えば、以前は三十秒で渡れた距離の横断歩道が一分や二分かかる場合がある。青信号の終わり頃に渡れ

るといふ過信が渡り切れず事故を起す場合がある。私の友人で、若い頃、体育会系だったが、信号のない道路の横断で、しかも、走って来るクルマの速度も読めず、事故にあつた例もある。高齢者は自己の身体能力の弱さを認識して道路を横断すべきだ。すなわち、高齢者よ、あなたは若い時の機敏性はもうないことを認識すべきだ。

また、高齢者が交通弱者になる理由の一つは、「唯我独尊」的歩き方や運転の方法だ。車道を歩く人、または、高速道路の入口を間違え、逆走する高齢者、認知症の場合でなくて、正常な高齢者の場合だ。「そののけ、そののけ高齢者が通る」という潜在意識がある。交通ルールに関しては、高齢者の甘えは絶対許されない。

高齢者よ、酒を呑んだら道を歩くな。私の田舎にいた友人は、老人会の新年会の帰りの夜道で交通事故にあつた。車道と歩道の区分けのない道で車道を酔って歩いてた。夜の宴会の高齢者は、クルマでの迎えが必要だ。

例えば、夜間、高齢者が酔って車道で寝ているのを

クルマでひいても、運転手は加害者となり、現場で手錠をかけられるのだ。高齢者が横断歩道でない場所を横切つて事故を起してもだ。テーマに「高齢者よ交通弱者になるな」と書いたが、逆説的だが、高齢者は常に自分が「交通弱者」だと自覚も必要だ。七十五歳で障害者（片足義足）の私は、歩道と車道の区分けのない道では、クルマが走つて来た場合、道端に寄り、歩行を止め、クルマをやりすこす。横断歩道では、「青信号」と同時に渡り、手を上げて横断する。運転手の中には、杖をついている私を見て、運転席の窓から、「あわてないでゆっくり渡つて下さい」という励ましを受けることもある。

高齢者が、無理をせず、運転者に迷惑をかけず、常にリスクを考えて行動することは、交通事故の加害者を減らすことにもなる。

また、高齢者がクルマを運転する場合、プライドを捨て、クルマ後部に「モミジマーク」を六十代から付ける「勇氣」も必要だ。そして、身体能力に赤信号が出たら、いさぎよく「運転免許証」を返上することだ。これも大切な勇氣だと思つ。

結論としては、高齢者は、交通社会においては、「そのけそこのけ高齢者が通る」ではなく、「高齢者が通ります。お手やわらかに」の心構えが大切だ。

また、老人会は、地元警察署と協力して、「交通安全教室」を開き、高齢者の交通安全意識の向上に努力することも必要だ。

高齢運転者マーク

大阪府吹田市

米田よねだ 萌希もえぎ（高校生）

## オート化の安全と油断

プリクラッシュセーフティシステムを知っているだろうか。自動車に搭載されたレーダーやカメラの情報から危険を察知し、運転者への警告やブレーキの補助操作を行い、被害を軽減するものだ。CMでは、各自動車メーカーが「スマートアシスト」や「トマールレー

ダー」といった名称で、その高性能ぶりを宣伝している。私はその高性能に対して関心を持つとともに、オート化に対する不安を感じている。あらゆるものをオート化し、それに頼ることで本当に安全が保たれるのであろうか。

私の家の近所には、私たち家族を可愛がって下さっているご老人たちがたくさん住んでいる。彼らは散歩好きでよく出歩くのだが、傍に某有名大学がそびえ立っているためか車の交通量が多い。信号も歩道もないので歩くにはとても危険である。大都会に比べると少ないが、夕方になると辺りは暗くなり、平穩な住宅街の道は歩行者にとっても運転者にとっても危険な道になる。そんな時にプリクラッシュセーフティシステム搭載の車なら、歩行者、特にすぐに車を避けることが困難な老人が道路にいても、その存在をレーダーが認知して車が自動制御されるので、歩行者は被害者にならず、また運転者は加害者にならずに済み安心するだろう。

しかし、私はその安心に一番の危険が潜んでいると考える。このようなオートシステムにあらゆるものが

統制されてしまうことを恐怖しているのではない。むしろ今より便利な世界になるだろうと思っっている。システムに対する運転者の依存と油断が、防げるはずの事故を起こしてしまうことを危惧しているのだ。万が一の時に最も頼りになるのはハンドルを握っている運転者の判断だ。プリクラッシュセーフティシステムはそもそもあらゆる状況での衝突や事故を防ぐものではない。自動車メーカーもシステムに対する依存をしないよう呼びかけている。とは言っても、このシステムを搭載した車は全国的に普及し、しばらくするとそれが当たり前前に感じてしまうだろう。最近では、政府が2020年代に運転者が操作しなくても走る「自動運転」の実現化を目指していることがニュースで話題になった。私たち人間がずっと夢見ていたあらゆるもののオート化は、ついに自動操縦の実現化にまで進んでいるのだ。

このような自動車の目覚ましい発展によってもたらされる安全が油断に繋がることは大いにあり得る。油断が引き起こす交通事故を少しでも抑え、交通安全を保つためには、ハンドル、ブレーキ操作の責任を持って

いるのはシステムではなく運転者だということを自覚し、運転者自身が安全運転を常に心がけるべきであると思う。また、ますます普及するであろうプリクラッシュセーフティシステムや車の自動運転などに対して、将来の運転者である私たちもそれらの有効活用方法を考え、運転者としての責任を学んでいくべきだ。